

インドネシア・バリ島におけるグローバル・ツーリズム下での移住者の増加と伝統的生活様式の解体—デンパサール近郊プモガン村の事例— 永野

インドネシア・バリ島におけるグローバル・ツーリズム下での 移住者の増加と伝統的生活様式の解体 —デンパサール近郊プモガン村の事例—

永 野 由紀子

(人文学部 人間文化学科)

1. はじめに

インドネシアのバリ島は、「神々の島」として知られる世界有数の観光地である。ツーリズムは、外国からの観光客の増加とともに、バリ社会に大きな変化をもたらした。目に見える大きな変化は、バリ島の外から仕事をもとめて流入してくる移住者の増加である。移住者は、外国人ではなく、インドネシア国内からの移住者が圧倒的に多い。だが、多言語、多宗教、多民族社会インドネシアにあって、国内からの移住者の増加は、バリ島で代々生活してきたバリ人とは異なる宗教や異なる言語、異なる生活様式や異なる文化をもった人々の増加を意味する。こうした変化は、ツーリズムにともなうバリ社会の急激な変化に一層の緊張感を加える。



地図1 本稿の主な舞台

もうひとつの重要な変化は、バリ人自身の生活様式の変化である。ツーリズムは、雇用機会を創出し、サービス部門の就業者を増大させた。こうした変化がバリ社会にもたらした一連の変動は、ツーリズムの基盤それ自体を揺るがすような質的变化を意味している。

バリ観光の特質は、「神々の島」、「最後の楽園」というキャッチフレーズで語られるように、単なる観光やレジャーというよりも、ヒンズー教と結びついたバリ人の伝統的な儀礼やバリ文化に接し、棚田の景観や豊かな自然に触れることで、近代的な生活様式に疲れた人々が、リフレッシュしたり、癒しをもとめられる点にある。バリが日本人観光客に人気があるのも、祖先崇拜や自然への畏敬と結びついた伝統的儀礼や豊かな自然が、今日の日本では失われつつある農村の景観や親密な近隣関係、親族関係へのある種の郷愁を呼び覚ますためである。こうしたバリ観光の基盤は、バリ人の生活が農業、なかでも水田稲作を中心に展開してきたことと無関係ではない。ツーリズムは、農業就業人口を減少させ、バリ人の生活様式を大きく変容させた。

この変貌は、バリ州の州都デンパサール市において、とりわけ顕著に現れている。本稿では、デンパサール市南デンパサール区プロモガン行政村（Desa Pemogan）⁽¹⁾の事例をとりあげ、グローバル・ツーリズムの進展が、バリ社会にもたらした変化の様相の一端を考察する。

2. ツーリズムと伝統文化

こうした近年の一連の変動は、文化人類学によるバリ研究が指摘してきたツーリズムにともなう伝統の再編や創出といった事態を大きく越えであるものである。これまでの内外のバリ研究は、人類学を中心に、植民地化や途上国の開発にともなう近代化やツーリズムといった一見すると伝統文化と齟齬する変化が、バリにおいては、必ずしも伝統文化の解体と結びつくものではなく、むしろ伝統文化をあらたに創出し、再編している側面があることを強調する。

例えば、エイドリアン・ヴィッカーズは、『演出された「楽園」—バリ島の光と影—』（1989）のなかで、バリについてのイメージの生成を分析し、楽園バリのイメージが、1930年代のオランダ植民地政府による観光地としてのバリの宣伝のために創出されたことを明らかにした。こうしたイメージは、独立を経て、インドネシア政府の開発計画のなかで国家経済の発展にとって重要な観光産業の中心に位置づけられることによって、むしろ再生され、強化されたとされる（A・Vickers, 1989）。ヴィッカーズは、観光産業を背景とするバリ人自身による楽園イメージの宣伝のなかで、イメージの交錯があらたな段階を迎え、今日では、西欧人によるバリ・イメージとバリ人自身によるバリ観を区別することが難しいことを示して見せた。

また、日本の人類学者山下晋司は、バリのなかに近代文明が失った世界を見だし、観光化がバリの伝統文化を破壊するという伝統文化を美化する「語り方」＝視点は、一見バリをもちあげているようで、実は、伝統文化を西欧近代文明の対極にある本質的な世界に閉じこめるオリエンタリズムに他ならないとして批判する。山下は、植民地化や開発政策の展開やグローバリゼーションの進展のなかで、生活の近代化や欧米化が進み、民族文化が消滅していくといった伝統と近代、グローバリゼーションとローカリゼーションとを対立させて考える二分法的視

点を批判する。つまり、バリの伝統文化の魅力は、西欧近代文明に毒されない本質的世界の存続ではなく、むしろ外界の刺激にたいし、柔軟でしたたかな対応のなかで生成していく点にこそとめられるのであり、観光との関わりの中で、伝統文化がダイナミックに「演出」、「操作」、「創出」されるとする。山下のねらいは、『バリ観光人類学のレッスン』（山下、1999）というタイトルが語るように、西欧近代文明やグローバリゼーションと対置して語られてきた本質的で固定的な民族や地域の伝統文化という人類学の従来の対象に対し、観光による文化の生成を扱う観光人類学を人類学の研究領域として創出しようとするにおかれていよう。

鏡味治也の『政策文化の人類学—せめぎあうインドネシア国家とバリ地域住民—』（鏡味、2000）もまた、固定的で本質的な民族の伝統文化の研究とは異なる人類学のあらたな領域のなかにバリ研究を位置づけようとするねらいに貫かれている。鏡味は、地域社会の慣習的な在り方を政府が指導し評価するバリの「慣習村」コンテストを取り上げ、地域の伝統文化が、観光や近代的な政府の政策といった外部世界とのつながりから切り離された固有で自己完結的なものではなく、外部世界の関与のなかで生成してくるとする。なかでも、鏡味は、観光産業のなかで、インドネシア政府のみならず、地域住民もまた自らの地域の伝統に自覚的な関心をもちはじめたことに着目する。つまり、政府の政策が外側から地域の住民生活に介入してくるだけではなく、地域住民の側でも政府の仕事を侵略し自分のものにしていく部分があったとする。鏡味の関心は、インドネシア共和国政府という国民国家の用意する近代的な仕組みや取り組みに対して、慣習や宗教といった地域の固有性や独自性を主張しうる文化的側面を盛り込もうとする地域の側からの対応を見ていくことで、地域の伝統慣習と近代的制度のあいだのすりあわせの過程を分析することである。鏡味は、こうしたすりあわせの過程は、文化面の政策に顕著に見られるとし、国家と地域住民のかけひきこそが、今日の人類学の対象となりうるものであり、国家や政治の分析に人類学が寄与しうる分野であるとする。鏡味によれば、国民文化の構築を目的とした中央政府の種々の政策は、建設途上の国家のなかで独自の地位を確保するべく画策するバリ人の執拗なアピールの場であり、同じ土俵で、インドネシア国家とバリ地域住民のせめぎあいが展開されたとされる。

オランダ植民地時代から日本占領期を経て、インドネシア独立後の国民国家の形成及び30年以上続いたスハルト政権崩壊後の今日に至るバリの歴史の中で、観光という枠組みなしにバリ人の生活やバリ社会、バリ文化を論ずることはできない。近年のグローバル・ツーリズムの下で、バリ島の外部からの移住者が増加し、バリ人の伝統的生活様式が質的に変化しつつあることを論じる本稿の立場は、伝統文化が、近代化や開発と必ずしも対立するものではなく、植民地化や国民国家化のなかで生成するという生成の視点を否定するものではない。また、西欧近代文明の対極にある過去から変わらぬ本質的で固定的なバリの伝統文化を前提とするものでもない。さらに、バリ島の各地域に見られる生活や文化の多様性を否定して均質的なバリ文化を

想定し、インドネシアの他の民族の伝統文化と対置させるものでもない。

本稿の課題のひとつは、近年のグローバル・ツーリズムが、バリ島の耕地、なかでも水田を大幅に縮小し、伝統的な稲作農業を解体することで、バリ人の生活様式がこれまでとは質的に異なるあらたな変化の局面を迎えていることを明らかにすることである。つまり、バリ島に近年起こっている変化は、これまで強調されてきたツーリズムの中で創出される伝統文化や、国民国家とのかけひきのなかで自覚される地域住民のアイデンティティといった側面をはるかに越え出ており、内部にあってはバリ人の生活様式を変容させ、バリ社会にこれまでとは異なるあらたな変化の局面をもたらしつつある。同時に、グローバル・ツーリズムは、バリ島の外からの移住者を増加させ、バリ人と外部社会とのあいだにかなりの緊張を醸成してきていると考えられる。本稿のねらいは、デンパサール近郊農村で現在生起している問題を手がかりに、グローバル・ツーリズムの下でのバリ社会の変化のあらたな相を析出することにある。

3. グローバル・ツーリズムとバリ社会の変化

まず、近年のツーリズムにともなうバリ社会の変化を、土地利用と産業構造と宗教に着目しながら、『バリ統計書』（Bali Dalam Angka）、『デンパサール統計書』（Denpasar Dalam Angka）に基づき概観しておこう。バリ島は、多民族社会インドネシアにあって、バリ語を話すヒンズー教のバリ人が圧倒的多数を占めるきわめて同質性の高い社会と言われている。バリ島の面積は5,636平方キロメートルで日本の愛媛県の面積に近似している。2004年の人口は317万9918人で、愛媛県の2倍以上に当たり、44万6226人が州都デンパサールに集中している。この年の外国人観光客は、バリに直航した外国人に限っても年間147万2191人（『バリ統計書』2004-2005）である。人口密度の高い愛媛県ほどの面積の島に、これほどの数の外国人観光客が押し寄せていることになる。なおこの数字には、首都ジャカルタなど他州から入った観光客は含まれていないため、バリを訪れる外国人観光客は、実際にはこの数よりもかなり多い。また、近年はインドネシア国内からの観光客も増えている。

バリで今日のような国際的なツーリズムの波が押し寄せるのは、スカルノ時代の1963年に日本の戦争賠償金で建設が着工したバリ・ビーチ・ホテルの開業と、スハルト政権下の1969年に着手されたグラ・ライ国際空港の開港以来と言われる。だが、空港開港当時の外国人観光客は、1万1278人にすぎず⁽²⁾、本格的な観光開発と国際観光の波は、1980年代になってからである。

表1 バリに直航した外国人旅行者数の変化

単位：人

年	国別順位 1 位	国別順位 2 位	国別順位 3 位	国別順位 4 位	国別順位 5 位	計
1985	オーストラリア 86, 132	日 本 48, 217	連合王国 22, 451	U S A 17, 153	イタリア 6, 512	211, 222
1986	オーストラリア 86, 317	日 本 58, 965	連合王国 26, 621	U S A 22, 230	イタリア 8, 642	243, 354
1987	オーストラリア101, 918	連合王国 41, 562	日 本 34, 235	U S A 30, 036	ドイツ 17, 735	309, 292
1988	オーストラリア114, 621	連合王国 51, 626	U S A 29, 800	ドイツ 24, 846	日 本 23, 745	360, 413
1989	オーストラリア126, 305	連合王国 61, 203	日 本 46, 210	U S A 34, 699	ドイツ 29, 076	436, 358
1990	オーストラリア135, 37	日 本 71, 383	連合王国 60, 463	ドイツ 35, 761	U S A 34, 699	489, 710
1991	オーストラリア143, 426	日 本 87, 645	連合王国 60, 781	U S A 38, 575	台 湾 38, 030	554, 975
1992	日 本164, 754	オーストラリア142, 238	連合王国 70, 572	台 湾 57, 465	ドイツ 54, 491	735, 777
1993	日 本173, 774	オーストラリア160, 563	連合王国 91, 250	ドイツ 77, 153	台 湾 71, 005	884, 206
1994	日 本210, 954	オーストラリア158, 893	連合王国103, 205	ドイツ 88, 877	台 湾 81, 980	1, 030, 944
1995	オーストラリア144, 075	日 本104, 819	U S A 95, 263	連合王国 88, 131	ドイツ 82, 177	1, 014, 085
1996	オーストラリア190, 688	日 本164, 072	台 湾126, 183	ドイツ 91, 527	連合王国 82, 082	1, 138, 895
1997	オーストラリア272, 077	日 本240, 245	台 湾 97, 494	ドイツ 94, 346	連合王国 87, 552	1, 230, 316
1998	オーストラリア312, 449	日 本214, 811	台 湾106, 353	連合王国 94, 550	ドイツ 90, 394	1, 187, 153
1999	日 本299, 233	オーストラリア228, 568	台 湾126, 183	連合王国115, 153	ドイツ 97, 649	1, 355, 799
2000	日 本362, 270	オーストラリア231, 739	台 湾157, 608	連合王国107, 181	ドイツ 83, 349	1, 412, 839
2001	日 本296, 282	オーストラリア238, 857	台 湾154, 575	連合王国116, 323	ドイツ 84, 028	1, 356, 774
2002	日 本301, 427	オーストラリア183, 390	台 湾168, 782	連合王国 96, 821	ドイツ 72, 711	1, 285, 842
2003	日 本143, 474	台 湾131, 720	オーストラリア107, 386	ドイツ 41, 503	連合王国 38, 659	993, 185
2004	日 本325, 849	オーストラリア267, 338	台 湾183, 624	韓 国 80, 273	ドイツ 70, 033	1, 472, 191

典拠：Bali Dalam Angka

1985年以降の外国人観光客数の変化を概観してみると（表1）、外国人観光客は毎年ものすごい勢いで増えており、1985年の21万1222人が、2000年には141万2839人と15年間で7倍近くに増えている。この15年間で、観光客数が減少するのは、1997年の通貨危機に始まる経済危機とスハルト政権崩壊の影響を受けた1998年だけである。それ以降は、2000年をピークに、2001年9月のニューヨークの同時多発テロ後の低迷、2002年10月のバリ島クタ地区の爆弾テロ後の激減と、2000年をピークに低迷している。2004年には、再び観光客が戻ってくるが、2005年12月のクタ地区での2度目の爆弾テロが再び大きく影響することは間違いない。

外国人観光客を国別に見みると（表1）、1980年代まではオーストラリアが1位で欧米人中心であるが、90年代になると日本が1位を占め、台湾や韓国といった他のアジア諸国もバリ観光の重要な担い手になってくる。なかでも、日本人観光客ぬきに今日のバリ観光を考えることはできない。そうしたなかで、激増していた日本人観光客が、1995年には前年と比べて半減し、再び1位の座をオーストラリアに明け渡している点に注意したい。これは、1995年2月にバリ島から帰国した日本人観光客が集団でコレラを発症したことの影響である。こうした観光客数の増減の波を考えると、爆弾テロのストレートな影響ともあわせて、観光は必ずしも安定した産業

とは言い難い。また、外国人観光客だけでも100万人を越える規模にふくれあがっただけに、その増減の波がバリ社会に与える影響は大きい。

ツーリズムの進展とともに、バリ島の人口（表2）も1985年の255万8479人から、2004年の317万9918人と20年間で1.24倍に増えている⁽³⁾。なかでも州都デンパサールの人口増加は顕著で、1995年の36万4419人から2004年の44万6226人と9年間で1.22倍に急増している。デンパサールは、1992年にバドゥン県から独立して8つの県と同等の第2級地方自治体になっているが、このことも人口増加の現れにほかならない。

これだけの人口の急増は、死亡に対して出生が多い自然増加ではなく、転出者よりも転入者が多い社会増に因る。こうした変化は、当然のことながら、バリ島の外部からの移住者の増加、すなわちインドネシア国家の中のバリ人以外の他の民族、ジャワ人やササック人の増加を意味するものであり、バリ州の宗教構成が変化していることが予想される。

インドネシアでは、9割以上がイスラム教徒であり、ヒンズー教はマイノリティだが、バリ州に限ってみると、ヒンズー教が圧倒的多数を占める。表3を見ても、1985年には93.4%をヒ

表2 人口の変化 単位：人

年次	バリ	デンパサール
1985	2,558,479	—
1990	2,656,649	—
1995	2,828,026	364,419
2000	2,998,770	398,932
2004	3,179,918	446,226

典拠：Bali Dalam Angka

表3 バリにおける宗教の変化

単位：人、()は%

	年	イスラム	ヒンズー	仏教	プロテスタント	カトリック	計
バリ	1985	132,752 (5.2)	2,383,032 (93.4)	14,899 (0.6)	13,244 (0.5)	8,841 (0.3)	2,552,068 (100)
	1990	140,813 (5.2)	2,515,634 (93.2)	14,909 (0.6)	15,577 (0.6)	12,702 (0.5)	2,699,635 (100)
	1995	158,564 (5.6)	2,631,210 (93.0)	16,037 (0.6)	10,258 (0.4)	11,957 (0.4)	2,828,026 (100)
	2000	180,401 (6.0)	2,752,131 (91.8)	21,287 (0.7)	24,652 (0.8)	20,299 (0.7)	2,998,700 (100)
	2004	186,613 (5.9)	2,907,540 (91.4)	19,045 (0.6)	44,352 (1.4)	22,368 (0.7)	3,179,918 (100)
デンパサール	2004	56,210 (14.8)	280,315 (73.9)	7,632 (2.0)	26,467 (7.0)	8,919 (2.3)	379,542 (100)

典拠：Bali Dalam Angka

ンズー教が占めており、それに次ぐイスラム教は5.2%にすぎず、他の宗教は1%未満である。2004年にはヒンズー教以外の宗教の比率が増え、ヒンズー教の比率が91.4%と若干減少するが、

依然としてヒンズー教が9割以上とバリ州のマジョリティであることは変わらない。

だが、デンパサール市においては、2004年現在ヒンズー教は73.4%であり、イスラム教14.8%、プロテスタントとカトリックを合わせたキリスト教9.3%、仏教2.0%と、今日ではヒンズー教が圧倒的多数を占めているとは言えない。また、バリ全体についても、統計的には、ヒンズー教のバリ人という同質性の高い集団を脅かすような宗教構成の変化は見られないものの、統計上は住人として表れてこないキブン（KIPEM）⁽⁴⁾と呼ばれる就労目的の一時滞在者や、不法就労者を含めると、ヒンズー社会やヒンズー教のバリ人から構成される同質社会というバリ島についての言説は、かなり揺らいでくる。

では、水田稲作を主な生業とする農業社会というバリ社会の特質は、どのように変化しているであろうか⁽⁵⁾。バリ州における土地利用の変化を表4で概観してみると、1985年から2004

表4 バリの土地利用の変化

単位：ヘクタール、（ ）は%

年	水田	畑	農園	屋敷地	国有林	民有林	養殖池	その他	計
1985	98,830 (17.5)	147,185 (26.1)	105,880 (18.8)	27,761 (4.9)	122,883 (21.8)	13,448 (2.4)	495 (0.1)	46,804 (8.3)	563,286 (100)
1990	93,291 (16.6)	125,915 (22.4)	130,852 (23.2)	33,266 (5.9)	124,217 (22.1)	12,574 (2.2)	893 (0.1)	42,278 (7.5)	563,286 (100)
1995	89,116 (15.8)	125,922 (22.4)	129,234 (22.9)	39,314 (7.0)	126,098 (22.4)	12,681 (2.3)	702 (0.1)	40,219 (7.1)	563,286 (100)
2000	85,777 (15.2)	127,429 (22.6)	127,164 (22.6)	43,550 (7.7)	126,719 (22.5)	11,892 (2.1)	671 (0.1)	40,465 (7.1)	563,667 (100)
2004	82,053 (14.6)	129,124 (22.9)	127,033 (22.5)	45,746 (8.1)	126,795 (22.5)	11,914 (2.1)	627 (0.1)	40,306 (7.2)	563,598 (100)

典拠：Bali Dalam Angka

年の間に、水田（Lahan Sawah）が9万8830ヘクタールから8万2053ヘクタールと一貫して減少し続けており、屋敷地及び建物用地（Perkarangan Rumah dan Sekitarnya）が2万7761ヘクタールから4万5746ヘクタールと一貫して増加し続けていることが見て取れる。つまり、この19年間で、水田は1万6777ヘクタール消失し、屋敷地及び建物地は1万7985ヘクタール増えている。水田の減少面積と屋敷地及び建物用地の増加面積がほぼ一致することから見て、この間の変化が、水田の宅地化であることは明らかであろう。その他の変化としては、19年間で、農園（Perkebunan）が10万5880ヘクタールから12万7033ヘクタールと2万1153ヘクタール増加し、畑（Tegalan）が14万7185ヘクタールから12万9124ヘクタールと1万8061ヘクタール減少している。バリの農園では、主にココナッツ（椰子）とコーヒーが栽培されており、輸出用のエステート作物を作るブ

ランテーションではない。畑には、乾田（Tegal）と樹園地（Kebun）が含まれており、乾田では陸稲が、樹園地ではバナナやオレンジやマンゴーが、畑では大豆やサツマイモや落花生やキャベツやトマトといった野菜が栽培されている。

水田の宅地化は、デンパサール市では、一層顕著である（表5）。1995年から2004年の9年

表5 デンパサールの土地利用の変化

単位：ヘクタール、（ ）は%

年	水田	畑	農園	屋敷地	国有林	民有林	養殖池	その他	計
1995	3,587 (28.9)	385 (3.1)	35 (0.3)	6,888 (55.6)	541 (4.4)	96 (0.8)	1 (0.0)	865 (7.0)	12,398 (100)
2000	3,147 (24.6)	398 (3.1)	35 (0.3)	7,260 (56.8)	538 (4.2)	75 (0.6)	5 (0.1)	1,322 (10.3)	12,780 (100)
2004	2,814 (22.0)	396 (3.1)	35 (0.3)	7,679 (60.1)	538 (4.2)	75 (0.6)	5 (0.1)	1,230 (9.6)	12,772 (100)

典拠：Depasar Dalam Angka

間で水田は3587ヘクタールから2814ヘクタールと773ヘクタールに激減し、屋敷及び建物用地は6888ヘクタールから7679ヘクタールと791ヘクタール増加している。こうした土地利用の変化は、何よりも、ツーリズムにともなう人口や世帯数の増加と関連づけて理解できよう。表6

表6 デンパサール市の区別水田面積の変化単位

単位：ヘクタール、（ ）は水利組織の数

年次	南デンパサール	東デンパサール	西デンパサール	計
1991	1,761 (10)	1,199 (15)	2,186 (21)	5,147 (46)
1995	1,285 (10)	826 (15)	1,465 (21)	3,576 (46)
2000	1,104 (10)	783 (15)	1,260 (16)	3,147 (41)
2004	955 (10)	777 (15)	1,084 (16)	2,816 (41)

典拠：Depasar Dalam Angka

注）表5の資料と一部面積が異なるが原資料のままにした。

からは、デンパサール市内での水田の減少が、西デンパサール区と南デンパサールで顕著であり、東デンパサール区は両地区ほど減少していないことが見て取れる。なかでも、西デンパサール区では、1995年から2000年の間に5つの水利組織（スバック）が消滅しており、市街地化が最も顕著である。また、南デンパサール区は、西デンパサール区より少し遅れて、市街地化が近年急速に進んでいる様子がうかがえる。

なお宅地化による水田の急速な減少は、必ずしも稲作の生産力の減少や、バリ州の域内での

米の自給の減少を意味しない。表7に見るように、水稻収穫面積は水田面積の約1.7倍であり、二期作が行われていることが伺える。1985年から2004年の19年間で、この間の水田面積の減少ほどは、水稻収穫面積は減少していない。またこの間の収穫量は、むしろ増加している。また、1985年から1990年の5年間については、水田面積は急減しているにもかかわらず、収穫面積は増加し、収穫量は飛躍的に増えている。収穫量と単位面積あたりの収量の増加は、米の自給を目指すインドネシア国家の増産政策⁽⁶⁾で高収量品種が導入されたためであり、バリでも在来種から高収量品種への転換が行われた。こうした品種の転換は、当然のことながら、生産力の高い農法への転換を意味する。つまり、品種の転換とともに、それまでの慣行農法から、化学肥料と農薬を使う現代農法に変化している⁽⁷⁾。

デンパサール市でも、同様の傾向が見てとれる（表8）。なお、デンパサール市では、単位面積当たりの収量が、バリの平均よりもかなり高い。このことは、表9のバリの県別土地利用状況によって、バドゥン県ないしはデンパサール市農業の特徴を知ることによって説明できる。バリで、水田稲作が中心といえる地区は、バリ

表7 バリの水稲収穫面積と収量と

単位面積当たり収量（乾燥籾）			
年	水稻収穫面積 (ha)	収穫量 (ton)	単収 (Kg/ha)
1985	164, 197	758, 463	4, 619
1990	165, 033	848, 414	5, 141
1995	155, 459	826, 624	5, 317
2000	153, 814	824, 386	5, 360
2004	142, 777	788, 883	5, 525

典拠：Bali Dalam Angka

表8 デンパサールの水稻収穫面積と

収穫量と単位面積当たり収量（乾燥籾）

年	水稻収穫面積 (ha)	収穫量 (ton)	単収 (Kg/ha)
1995	6, 002	35, 021	5, 834
2000	5, 607	35, 000	6, 242
2004	5, 231	33, 430	6, 391

典拠：Depasar Dalam Angka

表9 県別土地利用状況（2004年）

単位：ヘクタール、（ ）は%

県	水田	畑	農園	屋敷地	国有林	民有林	養殖池	その他	計
(1) シュンブレナ	6, 793 (8. 1)	7, 648 (9. 1)	18, 403 (21. 9)	5, 993 (7. 1)	41, 809 (49. 7)	—	322 (0. 4)	3, 212 (3. 8)	84, 180 (100)
(2) プレレン	10, 831 (7. 9)	37, 154 (27. 2)	29, 646 (21. 7)	4, 896 (3. 6)	48, 679 (35. 6)	888 (0. 7)	275 (0. 2)	4, 183 (3. 1)	136, 552 (100)
(3) カランガスム	7, 027 (8. 4)	22, 513 (26. 8)	27, 355 (32. 6)	2, 434 (2. 9)	14, 576 (17. 4)	2, 223 (2. 6)	—	7, 826 (9. 3)	83, 954 (100)
(4) クルンクルン	3, 903 (12. 4)	7, 738 (24. 6)	10, 060 (31. 9)	1, 273 (4. 0)	202 (0. 6)	657 (2. 1)	2 (0. 1)	7, 665 (24. 3)	31, 500 (100)
(5) バンリ	2, 882 (5. 5)	19, 613 (37. 7)	11, 706 (22. 5)	3, 282 (6. 3)	9, 341 (17. 9)	2, 195 (4. 2)	—	3, 056 (5. 9)	52, 075 (100)
(6) タパナン	22, 626 (27. 0)	13, 978 (16. 7)	23, 272 (27. 7)	5, 950 (7. 1)	10, 160 (12. 1)	3, 577 (4. 3)	—	4, 370 (5. 2)	83, 933 (100)
(7) キニアヤール	14, 878 (40. 4)	11, 370 (30. 9)	9 (0. 1)	5, 068 (13. 7)	—	1, 047 (2. 8)	16 (0. 1)	4, 412 (12. 0)	36, 800 (100)
(8) バドゥン	10, 299 (24. 6)	8, 714 (20. 8)	6, 547 (15. 6)	9, 171 (21. 9)	1, 490 (3. 6)	1, 252 (3. 0)	7 (0. 1)	4, 352 (10. 4)	41, 832 (100)
(9) デンパサール	2, 814 (22. 0)	396 (3. 1)	35 (0. 3)	7, 679 (60. 1)	538 (4. 2)	75 (0. 6)	5 (0. 1)	1, 230 (9. 6)	12, 772 (100)
計	82, 053 (14. 6)	129, 124 (22. 9)	127, 033 (22. 5)	45, 746 (8. 1)	126, 795 (22. 5)	11, 914 (2. 1)	627 (0. 1)	40, 306 (8. 3)	563, 598 (100)

出典：Bali Dalam Angka

島の南部にあるタバナン県、ギアニャール県、バドゥン県、デンパサール市であり、他の地区は水田よりもむしろ畑作の比重が大きい。バリ島は、島の中央部の火山帯は2000メートル越える高山が広がり、その南側山麓に豊かな水と肥沃な土壌の平野が拓けている。デンパサール市は、第2自治体になる前は、バリ島の南部のバドゥン県の県都であり、平坦部にあって生産力の高い稲作が行われてきた。

バリ島の北部や西部や東部には、このような広大な平野はなく、水田よりも畑の比重が高く、ココナッツやコーヒー栽培のための農園がかなりの面積を占めている。県別土地利用状況からは、バリ社会と一口にいても、地区ごとにかなりのヴァリエーションがあり、バリ島を農業社会ないしは稲作社会という言葉で語り尽くせないことは明らかである。

ツーリズムに伴う人口増と水田の宅地化という土地利用の変化は、当然のことながら、就業構造にも大きく影響する。表10の産業部門別就業人口を見ると、2004年現在では、農林漁業

表10 バリの産業部門別就業人口の変化

単位：人、()は%

年	農林漁業 ¹⁾	製造業	建設業	商業・レストラン・ホテル	運輸・保管・通信	金融・保険	サービス業 ²⁾	その他 ³⁾	計
1970	(66.7)	(5.8)	(2.5)	(10.5)	(1.2)	(0.2)	(8.3)	(4.9)	(100)
1980	(50.7)	(9.8)	(4.8)	(14.5)	(2.2)	(0.5)	(15.3)	(2.0)	(100)
2000	552,248 (32.4)	252,420 (14.7)	134,285 (7.8)	412,014 (24.1)	82,188 (4.8)	37,632 (2.2)	227,539 (12.6)	11,626 (0.7)	1,712,954 (100)
2004	681,320 (35.3)	190,420 (14.2)	104,595 (7.2)	489,750 (23.0)	86,245 (4.0)	21,215 (2.0)	234,725 (13.4)	26,895 (0.9)	1,835,165 (100)

典拠：2000年と2004年はBali Dalam Angka、1971年と1980年は間苧谷、2000、191頁より引用した。1971年と1980年の実数は不明

1) 農園労働者を含む。2) 公共サービスを含む。3) その他は、採鉱採石や電気ガス供給を含む。

に従事する人口は就業人口の35.3%を占めるにすぎず、それに次いで商業・飲食業・ホテル業が23.0%を占め、製造業14.2%、サービス業13.4%、建設業7.2%と続いている。つまり、就業状況から見て、農林漁業従事者が3分の1近くを占めて第1位であるが、第一次産業部門従事者よりも第二次産業部門と第三次産業従事者のほうが圧倒的に多い。

なお、同じ基準でバリの産業部門別就業人口の構成を分析した間苧谷の論文「バリにおける観光業と伝統舞踊」によると（間苧谷、2000、191頁）、1971年には、農林漁業従事人口は就業人口の66.7%と3分の2を占め、商業・飲食業・ホテル業は10.5%、サービス業8.3%、製造業5.8%、建設業2.5%である。1980年でも、農林漁業従事人口は50.7%と半数を超え、商業・飲食業・ホテル業は14.5%、サービス業15.3%である。ツーリズムが進行するこの間の第一次産業人口の激減と第二次産業人口、なかでも第三次産業人口の激増は明らかである。こうしたこ

とを考えると、今日ではもはや、バリ人の主な生業を農業とは言い難い。

また、産業別就業人口の構成を県別に見ると（表11）、農業従事者が4割以上を占めているのは、ジュンブラナとブレレンとカラングスムとクルンクルンとバンリとタバナンという9県のうち6県だけである。こうした就業構造の転換は、デンパサールにおいて一層顕著であり、今日

表11 産業部門別就業人口¹⁾（2004年）

単位：人、（ ）は%

	農林漁業 ²⁾	製造業	建設業	商業・レストラン・ホテル	運輸・保管・通信	金融・保険	サービス業 ³⁾	その他 ⁴⁾	計
バリ州	681,320 (35.3)	190,420 (14.2)	104,595 (7.2)	489,750 (23.0)	86,245 (4.0)	21,215 (2.0)	234,725 (13.4)	26,895 (0.9)	1,835,165 (100)
(1)ジュンブラナ	(40.2)	(9.3)	(9.4)	(21.6)	(5.3)	(0.3)	(12.6)	(1.3)	(100)
(2)ブレレン	(45.0)	(10.5)	(7.1)	(20.2)	(5.0)	(1.2)	(10.5)	(0.5)	(100)
(3)カラングスム	(58.0)	(11.5)	(4.4)	(12.7)	(1.9)	(0.9)	(9.0)	(1.7)	(100)
(4)クルンクルン	(40.2)	(11.8)	(6.0)	(22.8)	(3.2)	(1.9)	(12.7)	(1.4)	(100)
(5)バンリ	(56.8)	(15.5)	(6.2)	(12.2)	(1.2)	(0.5)	(6.9)	(0.9)	(100)
(6)タバナン	(51.2)	(12.4)	(7.0)	(13.7)	(2.5)	(2.7)	(10.1)	(0.5)	(100)
(7)ギアニヤール	(23.1)	(30.0)	(8.5)	(20.7)	(3.1)	(1.8)	(11.4)	(1.3)	(100)
(8)バドゥン	(17.2)	(12.3)	(8.9)	(37.9)	(6.0)	(2.5)	(14.4)	(0.8)	(100)
(9)デンパサール	(2.1)	(12.9)	(7.3)	(39.0)	(5.8)	(4.8)	(27.7)	(0.4)	(100)

典拠：Bali Dalam Angka

1)過去1週間以内に就労した10才以上の就業者。2)農園労働者を含む。3)公共サービスを含む。4)その他は、採鉱採石や電気ガス供給を含む。5)県別の人数は不明。

のデンパサールでは、もはや農業を継続することが困難な状況がでてきている。以下では、デンパサール市のプモガン行政村（Desa Pemogan）を事例に、平野部にあるかつての近郊農村が今日どのような状況にあるかについて考察する。

4. 対象地選定の経緯と対象地域の特性

まず、対象地域の特性を理解するために、デンパサール市南デンパサール区プモガン村を調査対象地として選出することになった経緯に触れておきたい⁽⁸⁾。プモガン村は、インドネシア政府林業省をカウンターパート機関として日本の国際協力機構（JICA）の援助によってバリ島デンパサール市に設立されたマングローブ情報センターが、啓蒙活動の対象とした地域である。持続可能なマングローブ管理活動の促進を目的に2001年から始まったマングローブ情報プロジェクトは、マングローブ林再生という課題に取り組む以前に、ゴミ問題に直面する。何よりもまずプロジェクトは、デンパサール市の上流からマングローブ情報センターのマングロー

ブ林に漂着する大量のゴミ処理のため、1日約2時間、3ヶ月間かけてセンター職員が清掃活動を行わねばならなかった。この結果、1日3m³、3ヶ月で375m³のゴミが集まった。だが、ゴミはその後も漂着し続け、ゴミ処理は、3ヶ月にわたる清掃活動で解決する問題ではなく、抜本的な対策が望まれた。そこで、マングローブ情報センターの水路の上流にあるゴミを出す村として浮かび上がってきたのが、プモガン村である⁽⁹⁾。

プモガン村は、デンパサール近郊の農村であったが、ツーリズムとともにバリ州の内外から多数の移住者が移り住むようになり、人口が急増している地域である。移住者には、バリ州内からの移住者とバリ州外からの移住者がおり、バリ州外からの移住者の中には、イスラム教のジャワ人が多数いる。

バリ島では、ゴミは昔から川に投棄されるか、土に埋められることが多かった。こうしたやり方でも、ある時期までは大きな問題にはならなかった。ゴミ処理が問題として浮上してきたのは、人口の増加に伴い、ゴミを出す人の数が増えたことも大きい。何よりもバリ人の生活様式が、ゴミを出す生活に変わったためである。この問題に対応するため、マングローブ情報センターでは、ゴミ収集のカートを設置したり、各集落の代表者を集めたワークショップをはじめ、様々な啓蒙活動を行った⁽¹⁰⁾。ワークショップに集まったヒンズー教のバリ人は、当初、自分たちの問題というより、移住者やイスラム教徒の問題として責任転嫁するところがあったと言う。だが、3ヶ月の清掃活動で収集した375m³の内訳は、①プラスチック（ペットボトルやビニル袋、ビニル包装）50%②お供え物15%③木（バナナの芯やココナッツの殻や小枝）10%④貝殻（養殖のエサの残り）8%⑤家庭ゴミ（野菜クズや衛生用品）5%⑥死骸（鶏、豚、犬）5%⑦衣類2%⑧缶2%⑨マットレス2%⑩紙類1%である（表12）⁽¹¹⁾。

ゴミの内容には、ヒンズー教徒が儀礼で使うお供え物も多数含まれており、イスラム教徒が食さない豚の死骸がある。こうしたことから、移住者にのみ問題を帰することができないことは明らかである。また、固形ゴミではないが、着色した汚水が流れてくることもあり、染色業者の染料のたれ流しが大きな問題として浮上してきた。

ゴミ問題に対するマングローブ情報センターの種々の活動は、現在も継続中である。本稿の関心は、ゴミ問題それ自体ではなく、プモガン村が、人口が急増し、バリ州以外からの移住者が多い混住地域であるという点である。ゴミ問題は、人口の急増という要因も大きい。飲料水がペットボトルの水になり、買い物に多数のビニル袋が使われ、お供え物のお皿がバナナの葉からプラスチック容器に変わるといったバリ島で生活する人々の生活様式の変化の影響を無視することはできない。

表12 375 m³の固形ゴミの内訳

ゴミの種類	%
①プラスチック	50
②お供え物	15
③木	10
④貝殻	8
⑤家庭ゴミ	5
⑥動物の死骸	5
⑦衣類	2
⑧缶	2
⑨マットレス	2
⑩紙類	1
計	100

典拠：JICA2001

かつてはデンパサール市の平場の近郊農村として、水田稲作を生業とするバリ人が大勢を占めていたプモガン村において、今日では、農業は、公務員や会社員、軍人、運転手やホテル・レストラン従業員、自営業等々、多くの職業のなかのひとつになっている。こうした混住地帯にあって、ゴミ問題は、生活環境の悪化にとどまらず、農業就業者にとっては生産基盤の破壊を意味する。

グローバル・ツーリズムの下での移住者の増加とバリ人の伝統的生活様式の変質を明らかにするという本稿の課題に照らして、ゴミ問題から見てきたプモガン村の現況は、プモガン村が、本稿の格好の対象地域であることを語っている。

5. プモガン行政村 (Desa Pemogan) の概要

(1) プモガン行政村の概要

プモガン行政村の成立は、1980年である。それ以前は、プドゥンガン行政村 (Kelurahan Pedungan) の一部であったが、人口増加に伴いプドゥンガンから分かれた⁽¹²⁾。プモガン行政村は、州都や県庁や市役所のあるデンパサールの官庁街から7キロメートル、南デンパサール区役所からは5キロメートルの位置にある。また、グラ・ライ・バイパスという空港からバリ最大のリゾート地であるクタを通してサヌールに抜ける幹線が村の南側を横断しており、村の西側をデンパサールの官庁街からクタに抜ける道路が縦断している。

鉄道がないバリでは、自動車道路だけが、観光客や観光物資をはじめ、人と物を移動させる唯一の手段である。それゆえ、観光ルートに近い平野部では、農地が日々、宅地や道路や店舗や宿泊施設に転用されている。かつては、平野部で水田稲作を生業とする人々が多かった近郊農村プモガンもまた、農地が日々消失しつつあるデンパサール市郊外のこうした地域のひとつの典型にほかならない。プモガン行政村の面積は971ヘクタール。2005年11月の人口は1万9424人で、世帯数は3990世帯 (KK) である⁽¹³⁾。

(2) 行政村を構成する16の集落

デサ・プモガンは、15のバンジャール (Banjar 集落) とひとつのカンプン (Kampung 集落) という16の集落から構成されている。集落ごとの人口と世帯数は、表13のとおりである。16の集落のうち15のバンジャールは、ヒンズー教のバリ人を構成員とするが、⑥のカンプン・イスラム (Kampung Islam) だけは、イスラム教のバリ人を構成員とする。彼らは、バリではマイノリティのイスラム教徒であるが、移住者ではなく、17世紀から代々バリに住み続けてきたバリ語を話すバリ人である。

バリの村や集落が、行政組織としてのディナス (Dinos) と慣習組織としてのアダット (Adat)

という二層構造をもつことはよく知られている。それゆえデサ・プモガンの16の集落も、バン

表13 バンジャール（ディノス）別人口と世帯数（2005年11月）

単位：人、戸

集落名（バンジャール、カンポン）	人口	世帯数(KK)
① BJ Pemogan Kaja（プモガンカジャ）	649	168
② BJ Panti Sari（パンティサリ）	422	106
③ BJ Panti Gede（パンティグデ）	551	105
④ BJ Dalem（ダラム）	283	72
⑤ BJ Dalem Kesumasari（ダラムクスマサリ）	456	94
⑥ Kampung Islam Kepaon（カンポンイスラム）	2,275	265
⑦ BJ Jaba Tengah（ジャバトゥンガ）	464	95
⑧ BJ Jabajati（ジャバジャティ）	777	140
⑨ BJ Duku Tangkas（ドクタングス）	1,393	344
⑩ BJ Taruna Bhinneka（タルナビンネカ）	1,319	293
⑪ BJ Praja Rakcaka（プラジャラカカ）	1,969	438
⑫ BJ Sakah（サカ）	2,147	479
⑬ BJ Rangkan Sari（ランガンサリ）	1,184	158
⑭ BJ Kajeng（カジェン）	1,898	379
⑮ BJ Gelegor Carik（ゲレゴルチャリ）	1,867	474
⑯ BJ Gunung（グンヌン）	1,770	380
計	19,424	3,990

典拠：人口と世帯数はプモガン行政村役場資料。設立年は2005年にディナス長に実施したアンケート調査より。

注）①②③⑬⑯はプモガン慣習村 ④⑤⑦⑧⑨⑩⑫⑬⑭はクパオン慣習村

ジャール・ディナスとバンジャール・アダットという重層的な性格をもつ⁽¹⁴⁾。これらは原則として範域的には重なり、身分証明書をはじめ各種証明書の発行や各種届けの受理といった行政上の様々な機能を果たすディナスと、宗教的機能を中心に様々な儀礼や慣習法や慣行といった領域に関わるアダットというように、機能の違いによって区別される。バリでは、バンジャールはヒンズー教の集落を指し、カンポンはイスラム教の集落を指している。

バリのバンジャールは、日本の村落に例えると部落に最も近い。日本の部落は、行政組織であると同時に近隣組織であり、水利組織や祭祀組織、同族組織や親族組織とも重なる。つまり、日本の部落は、行政の最末端の単位として、土地改良区の単位として、農協の単位として、氏子組織の単位として、寺壇組織の単位として、青年団や若妻会、講等々の単位として、いくつもの異なる機能をもった集団が、部落という範域に重層的に重なり、同一の家や個人を構成員とすることが多い。それゆえ、部落は、実際には相異なるいくつもの機能をもった機能集団から成るが、こうした重層的な構成をひとつひとつときほぐして理解しようとしないう限り、あたかも単一不可分の共同体であるかのように現象する。日本の部落に冠せられた村落共同体という誤解にもとづく名称が今日でも横行するのは、こうした重層的な構成や連関が、ひとつの単

位の中に含まれていることが外からは見えにくいためでもある。これに対して、バリのバンジャールは、様々な集団が偶然バンジャールを単位として重なることもあるが、基本的には、異なる機能を持つ異なる集団のまま、いくつかのバンジャールにまたがることもあるし、ひとつのバンジャールを分断することもある⁽¹⁵⁾

(3) 2つの慣習村：プモガン慣習村とクパオン慣習村

プモガン行政村 (Desa Dinos) には、2つの慣習村 (Desa Adat) がある。慣習村の構成単位は、個人というよりは、バンジャールである。プモガン慣習村 (Desa Adat Pemogan) には、表 1 3 に示した①②③⑤⑥の5つのバンジャールが属し、クパオン慣習村 (Desa Adat Kapaon) には、④⑤⑦⑧⑨⑩⑫⑬⑭の9つのバンジャールが属している。⑥カンブン・イスラムは、イスラム教徒の集落なので、ヒンズー教の慣習村には属さない⁽¹⁶⁾。また、⑪バンジャール・プラジャ・ラカカは、国軍宿舎なのでディナスだけで、バンジャール・アダットはない。

プモガン慣習村

プモガン慣習村のメンバーになるための要件は⁽¹⁷⁾、ひとつには、デサ寺院 (Pura Desa)、プセ寺院 (Pura Puseh)、ダルム寺院 (Pura Dalm) という3つの寺院の活動に熱心に行うことである⁽¹⁸⁾、もうひとつは、プモガン慣習村の範域に家を所有していることである。プセ寺院は起源の寺であり、デサ寺院は村の寺、ダルム寺院は墓地の側にある死者のための冥界の寺である。プモガン慣習村には3つのダルム寺院があるが、ひとつのダルム寺院は①のバンジャールと②③のバンジャールの一部の死者が祀られ、もうひとつは⑤バンジャールの死者が祀られ、もうひとつは⑥バンジャールの死者が祀られている。これ以外にも、プモガン慣習村のバンジャールの死者が祀られるダルム寺院が、プドゥンガン村とダウ・プリ・カウ村という隣接する2つの行政村の中にそれぞれひとつずつあり、②と③のバンジャールの一部の死者が、この2つの寺院に祀られている。つまり、この慣習村のダルム寺院は、慣習村やバンジャールと完全に重なることなく、慣習村の中に複数あるし、慣習村の外にも葬られている。慣習村のメンバーの要件が、こうした3つの寺の活動を熱心に行なうとされていることは、言い換えると、熱心なヒンズー教徒であることを要件としている。もうひとつの要件は、賃貸住宅ではなく持ち屋に住むことである。逆に言うと、イスラム教徒や貸家の住人、一時滞在者は、アダットのメンバーになれないことが分かる。

慣習村は、2001年にあらたに制定された慣習村に関する州条例によって、植民地時代からの慣習を意味するアラビア語起源のデサ・アダット (Desa Adat) という呼び名に代えて、バリの在来の伝統的な村のまとまりを指すによりふさわしい言葉として、社会的なつきあいを意味するバリ語のデサ・パクラマン (Desa Pakraman) になった⁽¹⁹⁾。この州条例制定後のプモガン慣習村 (Desa Pakraman Pemogan) の役職は、1人の慣習村長 (Bundesa) の下に、3人の副村長

（Petajuh）と2人の秘書（Penyarikan）と2人の会計（Pesedahn）、3人の連絡係（Pemijan）がおり、5つの集落（Banjar）の各集落長（Klihan Banjar）がいる。また長老（Penglingsir）も3人いる。副村長は、1人は人と神との関係を担当し、もう1人は人と環境との関係、もう1人は人と人との関係を担当する⁽²⁰⁾。

慣習村長は1946年生まれ（59才）で、学歴は大卒である。市内の私立大学で獣医学を教えている。慣習村長になったのは、1988年で、5年任期で現在4期目である。慣習村長によると、プモガン慣習村の成立は9世紀にまで遡り、オランダ植民地時代にできたディナス（ブドゥンガン行政村）に、ブドゥンガン慣習村とクパオン慣習村とともに編入され、1980年にブドゥンガン行政村から分かれて、クパオン慣習村とともにプモガン行政村に編入された。

会計担当者によると⁽²¹⁾、慣習村の財産は、貸出銀行（LPD Desa Pakraman Pemogan）と、市場（Pasar Desa Pakraman Pemogan）と、農地（水田1.5ヘクタールと畑1ヘクタール）である。会計報告は、旧暦（1ヶ月が新暦の35日にあたり210日で1年のウク歴）⁽²²⁾にもとづき新年の1週間前に開催される1年に1回の総会で行なわれる。プモガン慣習村の会計収入で最も大きいのは、貸出銀行の売り上げの20%で、2005年度は2億5千万ルピアである⁽²³⁾。プモガン慣習村貸出銀行は、1992年に設立し、19人の従業員がいる。この貸出銀行は、利用者を慣習村のメンバーに限定せずに、メンバー以外のプモガン行政村周辺に住む多くの自営業者が利用できるようにしているため成功しており、この慣習村の重要な収入源になっている。

2005年9月28日から2006年4月23日までの203日のプモガン慣習村の収入で、貸出銀行の売り上げの20%に次いで大きい収入は、州と市からの援助各2500万ルピア、市の宗教局に申請してもらった450万ルピア、預金の利子、メンバーから半年に1回集める会費1人当たり千ルピアで、合計5億4千万ルピアである。なお、市からの援助4千万ルピア、農地2.5ヘクタールの賃貸料、慣習村が所有する市場の賃貸料、寄付金などは、慣習村の全体の会計ではなく、各寺に直接入る。なお支出としては、慣習村コンテストや青年団コンテスト等各種のコンテストの準備金、5つの集落への援助各1千万ルピア、寺院の修繕費や維持費、オダランやガルンガンはじめ寺院の祭りや様々な儀式に使われており、この期は、1億5千万ルピアが支出され、3億9千万ルピアが繰り越されている。ダルム寺院については、慣習村の外にある2つの寺院についても、バンジャールのメンバーが祀られているので援助している。

クパオン慣習村⁽²⁴⁾

クパオン慣習村のメンバーになるための要件は、9つのバンジャール・アダットのメンバーになっていることである。バンジャール・アダットのメンバーになるためには、①ヒンズー教徒であること②バンジャールの土地を所有していることを要件とする。メンバーは、a) 地元民と（Krama Ngarep）b) 非地元民（Krama Tamiu）がいる。a) 地元民とは、先祖代々、バンジャールに住んでいる人であり、この地で生まれても父親がこの地の出身でない限り、b) 非地元民

になる。さらに、b) 非地元民は、入会金を払う。入会金は、バンジャールごとに異なる。ちなみに、⑦バンジャール・ジャバ・トゥングは、50万ルピアである。また、現在、この地を離れ、ジャワ島などで働いているa) 地元民もいるが、お墓や祖先とのつながりがあるのでバンジャール・アダットとの関係がなくなるわけではない。

クパオン慣習村には2つのダルム寺院があるが、ひとつのダルム寺院には④⑤⑦⑧⑨⑩という6つのバンジャールの死者が祀られ、もうひとつのダルム寺院には⑫⑬⑭の3つのバンジャールの死者が祀られている。

慣習村長からの聞き取りによると、慣習村の歴史的成立がいつかはよく分からないが、バリ島にヒンズー教が布教し始めた頃いくつかあったバンジャールを統合して、ヒンズー教を布教するための3つの寺を共有させたことに始まるのではないかとのことである。クパオン慣習村で最も古いバンジャールは、④バンジャール・ダルムと⑫バンジャール・サカという2つの説がある。口伝のみの伝承で、碑文やロンタール等文字の記録がないので、はっきりしたことは分からない。慣習村長は、④バンジャール・ダルムに、政権にある者の家や屋敷地を指すJeroanという王朝時代の言葉が、今も残って使われていることから、④が一番古いのではないかと考えている。

いつから9つのバンジャールになったかは、はっきりしないが、④バンジャール・ダルムと⑤バンジャール・ダルム・クスマサリ及び⑫バンジャール・サカと⑩バンジャール・タルナ・ビネカは、もともとひとつのバンジャールだった。ただし、この2つのバンジャールが分かれた理由は、全く異なる。⑫と⑩は、新興住宅地ができて人口が増えたために、1998年に分かれた。④と⑤は、1965年9月30日の共産党によるクーデター未遂事件を契機に政権を掌握したスハルト支持をめぐって、1971年にスハルトの翼賛政党ゴルカル（Golkar）を支持する④とインドネシア国民党を支持する⑤に分かれた。こうした1965年の事件をきっかけとするスカルノからスハルトへの政治的移行期のバンジャール内の政治的対立を契機とするバンジャールの分離独立は、プモガン慣習村にもあり、②バンジャール・パンティ・サリと③バンジャール・パンティ・グドも、同様の契機で、1971年に分離している。慣習村長によると1977年頃までは、2つのバンジャールの関係は悪かったが、今は対立関係にはないとのことである。

クパオン慣習村の役職は、1人の慣習村長（Bendesa）の下に3人の副慣習長（Pangliman）がおり、それぞれ人間と神との関係、人間と環境との関係、人間と人間との関係を分担している。また、2人の会計（Pasodahan）と2人の秘書（Panyarilam）と3人の連絡係（Kasinoman）がいる。副慣習村長は、2003年に名称変更して以来、新たにできた役職である。2人の会計と秘書は、慣習村が大きいので北の④⑤⑦⑧と南の⑨⑩⑫⑬⑭の2つに分けて担当している。

慣習村長は、1960年生まれ（46才）で、⑦のバンジャール・ジャバ・トゥングのメンバーで、私立中学校の校長をしており、学歴は大卒である。慣習村長には、2002年から就任した。任期5

年だが、1期目は1年で終わった。2003年から慣習村長の選出は州条例で選挙によると定められたため、2003年の選挙で選ばれ、現在の任期は2008年までである。なお、前任者は、現在の行政村長（Kepala Desa）である。

クパオン慣習村の会計担当者によると、慣習村の財産は、貸出銀行（LPD）と農地（2.4ヘクタールと18アール）である。会計の収入は、貸出銀行の売り上げの20%で2005年度は1億6千万ルピア、州と市からの援助各2500万ルピア、農地2.6ヘクタールの賃貸料、預貯金の利子等で2005年9月17日から2006年4月18日の期間の収入は、合計3億6千万ルピアである。支出は、お祭りや儀式、寺院や墓地の補修や建築費、各種のコンテスト等で、この期間は合計6千600万ルピア支出しており、2億9400万ルピアを繰り越している。

なお、農地については、④⑤⑦⑧の4つのバンジャールの管理に任せている。また、一時滞在者であるキプンの登録料（新規10万ルピア延長3万ルピア）は、各バンジャール・ディナスで手続きが行われ、ディナスとアダットに50%ずつ配分されることになっている。だが、実際は、50%の半分の25%が行政村に収められる以外は、各バンジャールや慣習村に配分は任されている。プモガン慣習村では、人口登録はディノスの管轄であるとして、慣習村の収入にキプンの登録料は入れられていない。クパオン慣習村では、50%の配分のうち20%は作業チームの報酬、20%はバンジャール・アダットの収入、残り10%を慣習村の収入とする規則になっている。だが、クパオン慣習村でも、実際に、キプンの手数料の10%を慣習村に収めているのは、⑩⑫⑬⑭の4つのバンジャールだけであり、この期は274万ルピアであった。

（4）2つの水利組織（スバックSubak）：チュチュラン水利組織とクパオン水利組織

プモガン行政村には、チュチュラン水利組織（Subak Cuculan）とクパオン水利組織（Subak Kapaon）という2つの水利組織がある。バリの水田は、900年の歴史を誇るスバック（Subak）と呼ばれる水利組織によって管理されることで知られる⁽²⁵⁾。スバックは、1本の用水から水を引く水田の所有者ないしは耕作者で組織され、水の公平な分配と作物の豊穰を祈願する祭祀活動を行う。スバックのメンバーは、灌漑用水を共同で利用する区分内の耕地の所有者ないしは耕作によって自動的に決定されるため、原則的には、バンジャールを単位とせず、慣習村や行政村からも独立して編成されている⁽²⁶⁾。したがって、ひとつのバンジャールの成員が、いくつかの異なるスバックに所属することもありうるし、各スバックの成員がひとつの行政村や慣習村の成員に限られるわけでもない。また、ひとりの農民が、複数のスバックのメンバーになることもありうる。

日本の村落の水利組織が部落を単位とし、水田稲作と深く関わる氏子組織も部落を単位とすることを考えると、バリのスバックは不思議な存在である。バンジャールを日本の部落とストレートに結びつけて考えることができないのは、スバックも、死者を祀るダルム寺院の構成メ

ンバーも、必ずしもバンジャールを単位としていないことによる。

スバックは、水の分配という機能だけではなく、スバック寺院を共有する祭祀集団でもある。それゆえ、スバックのメンバーは、スバック寺院の維持管理と稲の生育にあわせた様々な儀礼を行う。また、スバックは、アウィグ・アウィグ (Awig-Awig) と呼ばれるスバックの成員の義務と権利を定めた慣習法をもち、成員はそれに従う。こうした全てを司るのが、プカセ (Pekaseh) と呼ばれるスバック長である。

チュチュラン水利組織 (Subak Cuculan) ⁽²⁷⁾

チュチュラン水利組織は、プモガン行政村の西側にある水田を管理するスバックで、メンバーには、クパオン慣習村や他の隣接する慣習村の成員も含まれるが、プモガン慣習村の成員が最も多い。このスバックには、表14のとおり①班から⑥班まで6つの班がある。この組織は、スバック長の下に2人のパグリマン (Pangliman) がいて、水の分配や作付け時期の決定と連絡、水路の掃除の調整と連絡を行っている。1人のパグリマンは①班から④班を担当し秘書 (Penyarikan) も兼任している。もう1人のパグリマンは⑤班と⑥班を担当し会計 (Pesedahan)

表14 チュチュラン水利組合の水田面積 単位：ヘクタール

班	かつて ¹⁾	1994年	2005年 ³⁾
①1班 Margaya I	30.050	14.523	—
②2班 Margaya II	23.565	—	—
③3班 Cuculan Tengah I	33.365	17.365	13.000
④4班 Cuculan Tengah II	50.933	29.125	20.000
⑤5班 Delod Pasekan	18.600	13.950	10.000
⑥6班 G.Sampi/ T.Kilap	74.487	48.046	40.696
計	217.500 ²⁾	123.009	83.696

典拠：Monografi Subak Cuculan1994

- 1)1994年12月「現在 (Linglah Mangkin)」と対比してバリ語で「かつて (Linglah Pangawit)」とされている。
また、1994年に、94.491haの農地が住宅や道路等の宅地に変化したと説明されている。
2)一部、数値に整合性がないが原資料のままにした。3)2005年の数値は、スバック長からの聞き取りによる

も兼任している。①班から⑥班までの各班には、クリアン・ムンドウック (Kelian Munduk) と呼ばれる班長とカシノマン (Kesoromann) と呼ばれる連絡係がいる。スバックのメンバーは、水田の位置に応じて各班に所属している。1人のメンバーが複数枚の水田を耕作しており、水田が離れている場合には、1人のメンバーが複数の班に同時に所属することになる。

チュチュラン水利組織が管理している水田面積は、表14に見るように、217.5ヘクタールあったが、1994年までに123ヘクタールと2分の1近くに減少している。1994年に作成されたチュチ

チュラン水利組織のモノグラフ (Monografi Subak Cuculan1994)によると、かつては217.5ヘクタールあった農地のうち94.5ヘクタールが住宅や道路等で宅地化し、1994年には水田経営面積は123ヘクタールにまで減少したと説明されている。水田の減少は、今日まで続いており、2005年現在、約83.7ヘクタールである。表15のように、1994年から2005年までの11年間で、スバックの構成員も189人から140人に減少している。こ

のスバックでは、自作よりも小作のほうが圧倒的に多い。自作地だけを耕作している構成員はほとんどおらず、自作地に小作地を加えて耕作するメンバーがほとんどである。小作料は、かつては稲の販売金額を地主1対小作1の比率で分配していたが、農業の担い手不足のため、今は地主1対小作2の比率である。このスバックでは、水田の耕作者は、自動的にスバックのメンバーになる。チュチュラン水利組織のメンバーの大半は、小作人で、ほとんどが兼業である。

なお、このスバックは、宅地化が顕著で、1班と2班は既に農地はなく、班の名前だけが残っている。また、3班の水田の大半は、土地所有者が水田をジャワ人に貸しているため、水田を畑として利用し野菜作が行われている。したがって、このスバックのメンバーは、3班を中心に、バリ島の外からきたイスラム教のジャワ人が多い。バリのスバックが、稲の生育にともなう様々な儀礼を行う祭祀組織であることは、既に述べた。こうした儀式や祭礼は、共有するスバック寺院の管理も含めて、バリ・ヒンズーと切り離して考えることはできない。イスラム教のジャワ人を多数メンバーとして含むこのスバックは、農業用水の利用組織としての機能は今日でも果たしているが、もはや祭祀組織としての性格はもたないと言って良からう。

クパオン水利組織 (Subak Kepaon)⁽²⁸⁾

クパオン水利組織 (Subak Kepaon) は、プモガン行政村の東側にある田を管理しているスバックで、西側でチュチュラン水利組織に接している。メンバーには、プモガン慣習村のメンバーやブドウンガン慣習村のメンバーもいるが、クパオン慣習村のメンバーが最も多い。このスバックには、表16のとおりに①班から⑥班まで6つの班がある。この組織は、スバック長の下に2人の秘書と会計がおり、各班に、班長とカシノマンが1名ずついる。この組織では、チュチュラン水利組合とは異なり、6人の班長がパグリマン (Pangliman) を兼任している。

表15 チュチュラン水利組合の構成員数
単位：人

	1994	2005
自作	49	27
小作	140	113
計	189	140

典拠：Monografi Subak Cuculan1994

注) 2005年の数値は、スバック長からの聞き取りによる

表16 クパオン水利組合の水田面積

単位：ヘクタール			
		1996年	2002年
① 1班	Tungging	26.959	18.595
② 2班	Wang Biga	43.195	23.195
③ 3班	Dajan Sema	62.570	19.750
④ 4班	Juwet	31.770	17.750
⑤ 5班	Timbul	60.430	42.430
⑥ 6班	Teruna	65.740	2.740
計		290.664	124.460

典拠：Monografi Subak Kepaon1996, 2002

1996年と2002年に作成されたモノグラフ (Monografi Subak Kapaon 1996, 2002)によると、このスバックが管理する水田は、この6年間で290ヘクタールから124ヘクタールと2分の1以下に激減している。チュチュラン水利組織よりも少し遅れて、水田の宅地化が進行している様子うかがえる。表17に見るように、スバックの構成員もこの6年間で472人から335人に減少している。このスバックでも、自作より小作のほうが多く、小作料は、地主1に対して小作2の割合である。ほとんどが兼業している。

表17 クパオン水利組合の構成員
単位：人

	1996年	2002年
自作	169	135
小作	303	200
計	472	335

典拠：Monografi Subak Kapaon 1996, 2002

6. プモガン村における人口増加と汚水・ゴミ問題

(1) バティック工房の廃液問題と農民

なお、クパオン水利組織では、近年、バティック工房から排出される汚水に悩まされている。既に1996年のクパオン水利組織モノグラフの中で、「最近バティック工房の着色した汚水がクパオン水利組織の用水路に流れてきて灌漑用水を汚し、稲の生育に影響を与えているという苦情がスバックのメンバーから多く寄せられている」という記述が見られる。クパオン水利組織のスバック長や班長からの聞き取り（2005年2月から2006年8月）の中でも、1995年頃から、バティック工房の汚水が深刻な問題になってきて、稲が育たず枯死したり、田植えの時に稲が立たなかったりする被害がでている。バティック工房から流される廃液は、化学薬品がはいっているので、植物だけに影響を与えるわけではない。水田のカエルが死んでおり、牛やアヒルといった家畜が水田の水を飲んで死んでしまうことを農民は危惧している。

チュチュラン水利組織でも同様の問題が生じている。チュチュラン水利組織のパグリマンは、水田に灌漑用水を入れた時、植物が枯れてしまうのですぐに水を換えなければならなかったことがあると話している。土壌にも影響がでており、水田のナマズやウナギやタニシが死んだり、これらの生物が少なくなっている。

プモガン慣習村の村長もまた、バティック工房の汚水で農民の足がかゆくなったり、田植えの際に稲がまっすぐ立たなくなるという被害を耳にしている。この地域では、近年、こうした事態をミナマタと称して、今後の被害の拡大を恐れる声が住民の間でさやかれている。住民から様々な相談を受ける立場にある慣習村長は、バティック工房を経営するジャワ人に果たして土地を貸してもよいものかどうかという相談を土地所有者から受けることがある。

バティック (Batik) とは、ジャワ更紗と呼ばれるインドネシアのろうけつ染めであり、近年は染料に化学薬品が使われることが多い。バティックの生産は、ジャワ島に集中しており、中部ジャワのプカロガンやソロやジョグジャカルタ、西部ジャワのチルボンや東部ジャワのマド

ウラ島、スマトラのジャンビ等が、地方色豊かな伝統的なバティック工房の産地として知られている⁽²⁹⁾。

バリ島では、本来バティック生産の歴史はなかった。だが、観光客向けの注文や輸出用の産地として注目され⁽³⁰⁾、ツーリズムの進展とともにジャワ島から訓練をうけた多数のバティック工房の経営者や職人がバリに移住してきて、バティック工房が増えている。プモガン行政村でも、1980年代から、中部ジャワのプカロガン（Pekalongan）出身のジャワ人が、親戚や同郷人、ロンボック人や東部ジャワから来た低賃金の一時滞在者を雇用してバティック工房を運営するようになった。

水利組織では、こうした事態に対して、スバック長から行政村長（クパラ・デサ）をとおして、バティック工房に廃水用水路に垂れ流さないよう数度にわたって申し入れている。当初は、抗議した時だけ一時的に汚水が減るだけで、効果はなかった。誰も見ていない深夜のうちに川にこっそり垂れ流し、着色された汚水が翌朝水田に流れてくることもあったと言う。クパオン水利組織では、数度にわたる抗議の末に、行政村長とスバック長とバティック工房の経営者代表という三者の間で、沈澱池を作り直接用水路に廃液を流さないこと、約束を破って廃液を流した経営者は、ペナルティとして罰金を科すこと等を定めた文書に署名を交わしている。また、行政村長の勧めで、2003年には「満月（Purnamaプルナマ）」という名のバティック工房経営者の会を結成し、「1. 布を川で洗わない。2. 染料を直接川に流さない。貯水池かフィルタールをとおして染料を流す。3. 守らなければ会員資格を失い、罰金を科す」等を定めている。

こうした農民及びJICAの職員による行政村長への働きかけをとおして、今日では、次第に深刻な廃液問題は影を潜め、表面的には沈静化しつつある。だが、廃液問題が最も深刻な被害を農民に与えていたのは、ツーリズムの絶頂で、バティック工房が最も多かった2000年である。それ以降は、ニューヨークの同時多発テロとクタの爆弾テロという2つの事件を契機に、輸出産業及び観光産業としてのバティックの生産は不振に陥り、プモガン行政村でもバティック工房をたたんでジャワに帰るジャワ人が増え、バティック工房の数は2000年以降減少している。こうしたことを考えると、抜本的な解決がなされたとは言い難く、今後も余談を許さない⁽³¹⁾。

（2）ゴミ問題と農民

プモガン行政村の農民が抱えているのは、バティック工房の廃液問題だけではない。スバックの農民にとって同じくらい深刻な問題は、用水路にたまるプラスチック・ゴミの問題である。2つのスバックはどちらも、班ごとに用水路の清掃を共同で、1ヶ月に1回から2回行っている。ゴミ問題は、住人が、川にゴミを直接投げ捨てるために起こる。スバックのメンバーにとって、解決できない深刻な問題をもたらしているのは、プラスチック・ゴミである。プラスチックは、燃やすことができず、腐敗しないので、川の底が浅くなり水が少なくなって、水

田に流れる水をせき止めてしまっている。かつては水田より低い位置にあった川が、今ではゴミで川底が上がり、川が水田よりも高くなっている。1メートル掘って埋めようとしたが、プラスチックであふれている。灌漑用のダムでの悪臭に悩まされた時期もある。

実際、クパオン水利組織のスパック寺院の脇を流れる用水路には、プラスチックの包装紙や袋、お供え物をはじめ様々な固形ゴミが滞留しており、スパック寺院の隣に「ここは神聖な場所。ゴミを投げ捨てるな」という看板が立てられている(写真1・写真2)。スパック寺院は、



写真1 用水路に溢れるゴミ



写真2 スパック寺院の脇のゴミの投げ捨てを禁止する看板

水路の要所に建てられる聖なる場所である。だが、今日のクパオン水利組織のスパック寺院は、ゴミと悪臭だけでなく、寺院の前をデンパサールの市街地からクタに抜ける幹線道路が通っているため、騒音と排気ガスに包まれている。

バティック工房の汚水とプラスチックゴミとどちらが深刻かという質問に対して、クパオン水利組織のスパック長は、「どちらも深刻な問題で、この地でどこまで農業を続けていけるか不安を感じている」と述べている。農業で生活の糧を得ていく専業農家にとって、問題はとりわけ深刻である。ゴミ問題の解決のために何をすればいいという質問に対して「世界のプラスチック工場をなくすしかない」と冗談交じりに答えている。今日では包装用のビニル袋や包装紙、ペットボトルをはじめ生活のすみずみまでプラスチック製品であふれている。ゴミを出す人口が増え、自然に還元できないゴミを出す生活様式に変わったことこそが、プモガン村のゴミ問題を生み出している。かつてのバリでは水田稲作のための水不足が深刻な問題だったが、皮肉にも、プモガン行政村の2つのスパックでは、農地が減少しているためこうした問題に今日悩まされることはない。それだけに、バティック工房の染料の廃液とプラスチックゴミの問題は、プモガン村の農民にとって、この地で農業を続けていくために、最優先で解決され

ねばならない問題になっている。

（３）人口増加と一時滞在の移入者の増加

最後に、こうした問題が生じる背景にあるプモガン行政村の人口増加を概観しておきたい⁽³²⁾。

表18のように、この村では、1992年から2005年までの13年間で人口は7554人から1万9424人と2.6倍に急増し、世帯数は1473世帯から4037世帯と2.8倍に増えている。こうした短期間での人口と世帯数の急増は、2000年から2005年までの人口動態からうかがえるように（表19）、転入者が転出者よりも圧倒的に多い社会増によるものである。ツーリズムが低迷する2000年以降も、プモガン村の人口はすごい勢いで増え続けている。転入者の前住地は、表20のように、バリ州内からの転入者が5割を越えており、バリ州外からの転入者よりも若干多い。

表18 プモガン行政村の人口と世帯
単位：人、戸

年次	人口	世帯
1992	7,554	1,473
1995	10,273	1,748
1999	11,423	2,452
2003	13,452	3,116
2005	19,424	4,037

典拠：プモガン行政村モノグラフ
(Monografi Desa Pemogan, 1992, 1995, 1999, 2003, 2005)

表19 プモガン行政村の人口動態

単位：人

年次	人口増加数	自然動態			社会動態		
		自然増加数	出生	死亡	社会増加数	転入	転出
2000	192	75	82	7	117	252	192
2001	303	92	95	3	211	475	264
2002	-26	36	60	24	-62	36	98
2003	1,645	12	50	38	1,633	1,742	109
2004	97	38	62	24	59	147	88
2005	5,984	29	58	29	5,955	6,279	324

典拠：プモガン行政村所蔵資料

表20 転入者の前住地

単位：人

年次	デソハサル市内	バリ州内	バリ州外	国外	計
2000	27(10.7)	116(46.0)	109(43.3)	0	252(100)
2001	75(15.8)	180(37.9)	220(46.3)	0	475(100)

典拠：プモガン行政村所蔵資料

注：2003年～2005年は不明

だが、見落としてはならないことは、人口には数えられないキブン（KIPEM）と呼ばれる一時滞在者の多さである。人口増加として現象するのは、身分証明書に記載する住所を出生地や前住所から現住所であるプモガン行政村に移して、バンジャール・ディナスのメンバーになる

転入者だけである。こうした人口増の背後に、就労目的で3ヶ月以上滞在しているキプンと呼ばれるバリ州以外のインドネシアの島々からの膨大な数の移住者がいることを見落としてはならない。表2-1に見るように、毎年2000人近い一時滞在者が、一時滞在証明書の発行を新規に申請している。キプンは、3ヶ月ごとに延長して、更新することができる。表2-2に見るように新規の申請者よりも、延長の申請者のほうがかなり多い。延長の回数制限はなく、延長申請の手続き料を払えば何回でも更新できる。キプン

表2-1 プモガン行政村の一時滞
在新規申請者数の変化

単位：人

年次	一時滞在 新規申請者数
2004	1,965
2005	2,284

典拠：プモガン行政村所蔵資料

表2-2 プモガン行政村の一時滞在外を含む住民数（2005年9月の1ヶ月間）

単位：人

	人 口			一時滞在 新規申請者			一時滞在 延長申請者			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
人数	8,983	8,456	17,439	95	29	124	263	87	350	9,431	8,572	17,913

典拠：プモガン行政村所蔵資料より

とは、こうした新規の申請者と延長の申請者を含めて、身分証明書に記載されている住所を離れて3ヶ月以上の長期にわたって働く就労者のことである。一時滞在外者の性別は、女性よりも男性のほうが圧倒的に多い。つまり、キプンとは、バリに就労先をもとめて故郷を離れ、故郷に住む家族に仕送りしたり、家族と共にバリで働く出稼ぎ者にほかならない。こうしたキプンを加えると、プモガン行政村の人口増加は一層飛躍的である。

さらに、一時滞在外者の背後には、一時滞在外者の申請をしない膨大な数の不法就労者や、3ヶ月未満の短期間で元住所と就労先のバリを行き来する出稼ぎ就労者がいる。一時滞在証明書の申請手続きは、婚姻届けや出生届けや死亡届け、身分証明書や移動証明書など各種届けや各種証明書と同様、バンジャール・ディナスで行う。プモガン行政村では、バリ州以外の一時滞在外者から手数料として新規の申請時に10万ルピア、3ヶ月後の延長の申請時に3万ルピアを徴収する。バリ州外からの一時滞在外者の証明書発行の手数料は、他の届けや他の証明書の発行及びバリ州内からの一時滞在証明書の発行の手数料とは異なり、後者の手数料が全てバンジャール・ディナス内で処理されるのに対し、バリ州外からの一時滞在外者の新規と延長の手数料は、その25%（新規2万5000ルピア、延長7500ルピア）が行政村の収入となる。残り75%については、25%はバンジャール・ディナス、50%はアダット（バンジャール・アダットと慣習村）という原則はあるが、実際には、各バンジャールや慣習村の自由裁量に任されており、手続きを行うチー

ムの手数料や、バンジャール・ディナス、バンジャール・アダット、慣習村に配分されている。バリ州外からの一時滞在の新規の手数料10万ルピアは、他の手数料に比べて高く、就労目的の非バリ人の一時滞在者が多いデンパサール市内の行政村や各バンジャールの貴重な収入源になっている。一方、就労目的でバリにきた低賃金労働者層のキプンにとっては大きな出費であり、この手数料をめぐって、地元民のバリ人と非地元民の非バリ人とのあいだに緊張関係があることは間違いない。一時滞在の申請をしない不法就労者についてのペナルティとして罰金20万ルピアが、見つかると手数料に上乗せして請求される。2002年10月のクタ地区での爆弾事件後は、バリ州外からの不法就労者を摘発する抜き打ち検査が増えており、非バリ人とバリ人の緊張感は一層高まっている。

一時滞在者の元住所を見ると（表2-3）、東部ジャワから移動してきた者が圧倒的に多く、

表2-3 一時滞在延長申請者の前住地（2005年9月の1ヶ月間） 単位：人

	東部ジャワ	中部ジャワ	西部ジャワ	ロンボック	その他*	計
人数	230	34	5	27	54	350

典拠： プモガン行政村所蔵資料より

*不明を含む

中部ジャワとロンボックがそれに続いている。東部ジャワの中では、海を隔てて3キロ先でバリ島に接しているバニウワギから移動してきた者が92名と最も多く、ジュンブル66名がこれに続く。中部ジャワではバティックが盛んなプカログン17名が最も多い。エスニシティで見ると、一時滞在者の大半は、ジャワ語を話すイスラム教のジャワ人であり、ロンボック島から来たササック語を話すイスラム教のササック人がこれに続いている。

身分証明書の住所を現住所に変更する転入者は、新興住宅地で持ち家を建てたバリ人や、資金調達のために現住所に住民登録する必要のあるジャワ人の自営業の経営者層が多い。プカログンから転入してきたバティック工場の経営者もまた、こうした層の一翼をなす。これに対して、就労目的の一時滞在者は、建設業や製造業や農業部門の低賃金日雇い労働者が多く、バリ人よりも安価な労働力の従業員として自営業等に雇用されている。なかでも、ロンボック人は、ブルー・ロンボックという呼称で呼ばれ、3K労働を厭わない低賃金のブルーカラー層として定着している。つまり、バリ州外からデンパサール市に仕事を求めてきた外来者は、営利目的できた経営者層と仕事をもとめてきた低賃金の労働者層という二極に分けられる。

表2-4でプモガン行政村の職業別就労人口の変化を見ておこう。人口に対して就労者数が多いに少ないので、全体の傾向性を追うにとどめたいが⁽³³⁾、この10年で、公務員や会社員という被雇用者や自営業主が急速に増加し、農民が急速に減少している傾向が明らかである。

表 2 4 職業別就労人口

単位：人、() は%

年次	被雇用者			自営業主	農民	職人 (大工)	日雇い 農業者	定年 退職者	サービ ス業	民芸職人 制作者	畜産	計
	公務員	国軍人	会社員									
1995	168 (8.1)	620 (30.0)	492 (23.8)	145 (7.0)	569 (27.5)	25 (1.2)	40 (1.9)	11 (0.5)		—	—	2,070 (100)
1999	185 (7.4)	675 (27.1)	566 (22.7)	275 (11.0)	646 (25.9)	60 (2.4)	62 (2.5)	23 (0.9)	—	—	—	2,492 (100)
2003	200 (6.9)	750 (25.9)	800 (27.6)	552 (19.0)	400 (13.8)	75 (2.6)	65 (2.2)	32 (1.1)	25 (0.9)	—	—	2,899 (100)
2005	385 (14.3)	—	825 (30.7)	689 (25.7)	376 (14.0)	—	72 (2.7)	—	—	275 (10.2)	62 (2.3)	2,684 (100)

典拠：プモガン行政村モノグラフより (Monografi Desa Pemogan, 1995, 1999, 2003, 2005)

注：2005年のみ職業の分類が異なり、軍人と職人と定年退職者の項目がなくなり、民芸制作者と畜産の項目が追加されている。

こうした人口の激増のなかで、宗教構成はどのように変化したであろうか。表 3 のバリ州及びデンパサール市の宗教構成と表 2 5 を対比すると、プモガン行政村の宗教構成の特質は、一

表 2 5 プモガン行政村の宗教構成

単位：人、() は%

年次	イスラム	ヒンズー	プロテスタント	カソリック	仏教	計
1992	1,285 (17.0)	6,035 (79.9)	132 (1.7)	63 (0.8)	21 (0.3)	7,554 (100)
1995	2,074 (20.2)	8,012 (78.0)	136 (1.3)	46 (0.4)	5 (0.0)	10,268 (100)
1999	3,133 (27.4)	8,009 (70.1)	171 (1.5)	108 (0.9)	9 (0.1)	11,430 (100)
2003	3,238 (23.6)	10,177 (74.1)	178 (1.3)	135 (1.0)	9 (0.1)	13,737 (100)
2005	2,945 (15.2)	16,281 (83.8)	118 (0.6)	51 (0.3)	29 (0.1)	19,424 (100)

典拠：プモガン行政村モノグラフ

(Monografi Desa Pemogan, 1992, 1995, 1999, 2003, 2005)

注：一部、表 1 8 の人口数と対応しない年もあるが原資料による。

目で明らかである。バリ州では、国民の90%がイスラム教というインドネシア国家にあって、ヒンズー教が90%以上を占め、イスラム教が5~6%でマイノリティのヒンズー社会であった。デンパサール市では、ヒンズー教は73.9%と後退し、イスラム教14.8%、プロテスタント7.0%、カソリック2.3%、仏教2.0%である (2004年現在、表 3 参照)。プモガン行政村の宗教構成は、どの年次も、ヒンズー教は70パーセント、イスラム教は15%を越えており、デンパサール市の宗教構成に近いように見える。だが、デンパサール市では、ヒンズー教とイスラム教を除く他の宗教の合計が10%以上を占める多宗教の構成になっているのに対して、プモガン行政村では、ヒンズー教とイスラム教を除く他の宗教は合計しても1~3%ときわめて少数である。つまり、

プモガン村では、ヒンズー教とイスラム教以外の宗教が極めて少数であるがゆえに、デンパサール市より一層マジョリティのヒンズー教対マイノリティのイスラム教という構成上の特質が先鋭に出ている。こうした宗教構成上の特質は、プモガン行政村を構成する16の集落のうちのひとつが、カンブン・イスラムというイスラム教のバリ人の集落であることと無関係ではない。1992年から1999年までは、転入者の増加のなかで、ヒンズー教が80%から70%と急速に減少し、イスラム教が17%から27%と急速に増加している。だが、1999年から2005年までは、再びヒンズー教が84%と増加し、イスラム教が15.2%と減少する。こうした宗教構成の変化は、この間の転入者の内訳、すなわちバリ州の内からの移動と外からの移動を区別して考えねばならない。また、通貨危機に始まる経済危機のバリへの影響、同時多発テロやクタの爆弾テロの影響、原油価格の引き上げといった事態のなかで、レストランやホテル以外にも、大きな雇用機会を提供している輸出産業の進退といった要素ともあわせて考えねばならない。

（4）プモガン行政村の住人の4類型

以上の分析をとおして、デンパサール市南デンパサール区にある人口急増地帯プモガン行政村の住人は4類型に大別されることが明らかにされた。(i) 先祖代々この地に住んできたヒンズー教のバリ人、(ii) 先祖代々この地に住んできたイスラム教のバリ人、(iii) バリ州内からプモガン村に移動してきたヒンズー教のバリ人、(iv) バリ州外からプモガン村に移動してきた非ヒンズー教の非バリ人の4つである。

(i) は、具体的には、プモガン村にある2つの慣習村のメンバーの地元民である（表13参照）。具体的には、プモガン慣習村に属する5つのバンジャール・アダットの地元民（①プモガン・カジャ②パンティ・サリ③パンティ・グド④グレゴール・チャリ⑤グヌン）とクパオン慣習村に属する9つのバンジャール・アダットの地元民（⑥ダルム⑦ダルム・クスマサリ⑧ジャバ・トゥンガ⑨ジャバ・ジャティ⑩ドュク・タンクス⑪タルナ・ビネカ⑫サカ⑬ランカン・サリ⑭カジュン）で合計14のバンジャール・アダットのメンバーがこれにあたる。(ii) は⑥カンブン・イスラム・クパオンのアダットのメンバーである。(iii) は、各バンジャールの新興住宅地等にバリ州内から転入者として移動してきたバンジャール・アダットの非地元民である。(iv) は、バリ州の外から移動してきたバリ人とは異なるエスニシティに属する非ヒンズー教の非バリ人を指しているが、プモガン村の場合、具体的には、イスラム教のジャワ人とロンボック人が大勢である。(iv) は、キブンと呼ばれる一時滞在者や各バンジャールのディナスのメンバーである。(iv) は、さらに、(iv-1) パティック工房をはじめ様々な自営業の経営者層と (iv-2) 一時滞在の低賃金の労働者層の2つに分けられる。

(iv-1) 経営者層のジャワ人は、一般に、バリ人よりも経営に対する高いモチベーションをもち、収入が高い。こうした経営者は、資金の調達のために銀行で手続きする等の必要から、

一時滞在者（キプン）ではなく、身分証明書の元住所を移動先の現住所に変更する転入手続きをして、カンブン・イスラムや他のバンジャールのメンバー（家族長 KK）になっている。

これに対して、(iv-2) の多くは、キプンと呼ばれる一時滞在者である。バティック工房はじめ様々な自営業の従業員、カキリマ（Kakilima）と呼ばれる屋台の食べ物屋、バリ人から農地を借りて畑で野菜を作る農民、日雇い農業者等々、東部ジャワやロンボックから移動してきたイスラム教のジャワ人やササック人である。元住所では生活の糧が得難く、仕事をもとめてきた出稼ぎ農民が多い。

一時滞在証明の手数料10万ルピアをめぐる地元民とバリ州の外から就労目的で来た移住者との間に潜在する緊張関係の背後には、単なる地元民と非地元民の移住者ではなく、ヒンズー教とイスラム教という宗教の違いが横たわっている。こうした様々な職業をもつ様々なエスニシティの住人が混住する人口急増地帯の潜在的な葛藤や軋轢に目を向けるため、本稿では、まず最初に、(i) の住人への聞き取り調査の結果を分析し、グローバル・ツーリズムの下で、かつての近郊農村がどのように変貌しているかの一断面を明らかにしてみたい。

7. 2つの水利組織のメンバーへの聞き取り

(i) のカテゴリーに属す住人は、2つの慣習村のメンバーとして、先祖代々の屋敷地に住むヒンズー教のバリ人である。かつては、ほとんど農民であったが、今日では農業はもはや主ではなく、教員や公務員、ホテル従業員や運転手や警備員、会社員、仲介業、雑貨屋や食堂、縫製業等々様々な職業の人々がいる。ここでは、2つの水利組織の役職者を中心に彼らの家族構成や生活について聞き取りすることで、地元のバリ人の生活の一端を浮かび上がらせたい。

まず、バティック工房の染料の廃液の問題とプラスチック・ゴミの問題について悩むクパオン水利組織のメンバーの3つの事例から見ていきたい。

【事例1】⁽³⁴⁾

◇対象者の属性：クパオン水利組織のスバック長。1962年生（44才）。小学校卒。クパオン慣習村の⑨バンジャール・ドク・タンクス（Br Dukuh Tangka）のメンバー。5年前（2001年）からスバック長（1期5年）

◇家族：8人兄弟（長男、長女、次男、次女、三男、四男、五男、六男）の第1子（長男）で、現在は、妻（1977年生29才）と子供2人（長女11才と長男3才）の4人家族（KK）である。

◇屋敷地：30aの屋敷地には5家屋7部屋あり、6家族(6kk)23名が住んでいる。7部屋の住人は以下の通りである。

- ①本人（長男）夫婦家族（4人）②両親夫婦（2人）③弟（四男）夫婦家族（4人）④弟（次男）夫婦家族（4人）
⑤弟（六男）（1人 未婚）⑥叔父と叔父の長男夫婦家族（5人）⑦叔父の次男夫婦家族（3人）。⑤は未婚なので、家屋は別だが②の両親夫婦家族（KK）の一員に数えられる。①②③は同一家屋の3部屋に住んでいる。

◇農業をしている兄弟は④と⑤。④弟（次男1966年）は小作50a+畜産（牛）12頭。畜産は⑤弟（六男1976年生）と共同。⑤弟（六男）は小作40a+畜産（牛）12頭。父（70才）はあひる150羽を飼って卵を採っている。③弟（四男1972年生）は農業しておらず友人とレンタカーの会社（自営）を経営している。また、この屋敷地に住んでいない弟が2人おり、うち1人の弟（三男1970年生 未婚）は民間会社（コーポレー）の会社員。もう1人の弟（五男1974年生 未婚）は警備員。

◇農業経営：現在は、21アール（自作）の水田と、1ヘクタール（25アール×4、4人の土地所有者のうち1人はクパオン慣習村の⑧パンジャール・ジャバ・ジャティのメンバーだが、他の3人はプドゥンガン慣習村のメンバー）の水田を4人の土地所有者から借りて小作している。水田経営面積は121aで、水田は全て5班にある。4年前まで、この1ヘクタールの小作に加えて、6班にある農地2ヘクタール（25アール×8人）を小作しており、水田経営面積は321アールだった。2ヘクタールの水田は、この4年の間で全て宅地化した。3ヘクタールの小作は体力的に無理だったし、コストがかかるので、1ヘクタールの小作でちょうど良い。21アールの自作地だけでは生活できないので、農業で生活するために小作している。小作料は地主と小作の取り分は1対2。父のあひるの放し飼いも手伝っている。アヒルの卵は、1個700ルピア。市場で自分で売れば1個4000ルピアで売れる時もあり利益もある。だが、妻は農業は手伝うが、販売には関心がないようだ。

◇水田の作付け：クルタマサ（Kertamasa）とガドゥ（Gadu）：1年に2回収穫できるが、水が足りないので、班を2つに分けて、雨期の12月はスバックの全員が田植えをするクルタマサであるが、乾期の8月はスバックの6つの班のうち3つの班のみが田植えを行うガドゥである。つまり、スバックのメンバーは、2年に1回ガドゥを行うので、2年に1回2期作することになり、2年で計3回収穫することになる。ガドゥは、スバックの最も大切なルールなので、毎年、各戸に正式な書類を配ってガドゥの年を通知する。大体3～4ヶ月で収穫できる。収穫後は大豆を植えている。ガドゥでない年は、7月の大豆の収穫の後は田を休ませる。ガドゥは、水不足のためだけではなく、土地を休ませる意味もある。皆が耕作すると米価も下がる。

◇農作業：耕耘は、農業している④次男と⑤六男との共同作業で121アール+90アールの水田211アールを3日間かけてやる。以前は牛を使っていたが、7年前、経営面積が321アールだった時に、ヤンマーの中古の手押し型トラクターを400万ルピアで購入した。4頭の牝牛を1頭100万ルピアで売って現金で購入した。田植えは、タバナン県の田植え専門の農業日雇い労働者を雇用している。雇用労働力5名で2日間で田植えをする。育苗と水管理は個人でやるが、消毒や追肥は3人の兄弟の共同作業。収穫は乾燥籾でクルタマサの時は10アール当たり650kg～700kg、ガドゥの時は800kg。

◇コストと収入：田植えの賃金は、1アール当たり5000ルピア×121アール。稲刈りは、業者に直接売るので、収穫の作業はない。クルタマサの時は、1アール9万ルピア、ガドゥの時は11万～11万5千ルピア。肥料や農薬代は、1ヘクタール当たり40万ルピア。1ヘクタールの小作地のコストは170万ルピアで、稲の販売金額は1000万ルピアである。

◇生活と家計：家計は同一の家屋に住む②+⑤（両親夫婦と未婚の六男）とも、③次男夫婦家族とも、④四男夫婦家族とも別々。台所も食事も別々。母が高齢なので、料理を作るとき本人の妻が手伝う。できない時は次男

の妻が手伝っている。本人夫婦家族4人は1ヘクタールの水田の小作の収入で生活している。父親のアヒルの田の放し飼いを手伝うが、収入は父のもの。世話が大変だが、アヒルの卵の収入のほうが1ヘクタールの水田よりも大きい。父が手伝いの謝金を払うことはないが、困っている時には助けてくれる。

◇先祖代々の農地：21アールの先祖代々の自作地は、自給用で、農業していない兄弟も含めて6人の男兄弟で分けている。この農地は、農薬を使わない慣行農法で、草取りや稲刈り、乾燥と脱穀まで農作業は農業している3人の兄弟で共同でやる。祖母が生きていた頃は叔父にも分けていたが、今は叔父には分けない。

事例1は、専業農家で、6人兄弟のうちの3人までが兼業せずに農業している。比較的バリの昔ながらの農家らしい農家の姿をかいま見ることができる。屋敷地の居住形態や継承した農地の利用の仕方を見ると、父系で、男子均分相続の様子がうかがわれる。だが、生活は、夫婦家族が基本単位であり、両親が高齢な場合でも、未婚の子供がいる限り、ひとつの独立した生活単位として扱われる。

だが、田植えや稲刈りといった農繁期の作業を見ると、農業雇用労働力を使い、稲刈りに至っては、収穫されないまま米の仲買に直接販売されている。以前は、バンジャールで、耕耘や田植えや稲刈りを共同でしていたし、牛を所有していない人が食事の準備をする等して助け合い、相互扶助や協同作業が行われていた。今は農繁期の農作業は田植えも稲刈りも雇用労働力になった。スハルトが高収量品種を導入した30年ほど前から変わってきたと言う⁽³⁵⁾。

この事例では、専業農家であり、兄弟が畜産で牛を飼っていることもあって、バティック工場の廃液で汚染された灌漑用水の問題が、一層深刻に受け止められていた。また、水田の宅地化は、3ヘクタールの水田経営面積を1ヘクタールに縮小し、収入減として現れている。こうした問題は、自作地をもたない経営規模の小さな小作農の場合は、一層深刻である。次にこうした小作農の事例を取り上げる。

【事例2】⁽³⁶⁾

◇対象者の属性：クパオン水利組織の5班の班長兼バグリマン。57才ぐらい（父が病気で記録がないので正確には年齢は分からない。両親が病気がちだったので、小学校を中退して農業をしていた。貧しくて食べるご飯がなかったときもある。経済力のない家族だった）。1971年から班長をしている。クパオン慣習村の⑧バンジャール・ジャバ・ジャティのメンバー。

◇家族：本人と妻（1951年生）、長男（1974年生）夫婦と孫、未婚の次男（1977年生）と三男（1980年生）の7人が同じ家屋に住んでいる。妻は仕立屋さんに勤めている。長男は整備士とカフェの警備員、次男はクタのホテルの警備員、三男は会社員である。同じ家屋に住んでいても長男の夫婦家族とは別家計。

◇屋敷地16アールに5つの家屋があり、①本人（長男）家族（7人）と②弟（次男）夫婦家族（6人）と③叔父の長男夫婦家族（8人）と④叔父の次男夫婦家族（3人）と⑤叔父の三男夫婦家族（5人）が住んでいる。②弟夫婦家族の家屋には、弟と弟の妻と弟の子供2人と本人の父と本人の妹（未婚）の6人が住んでいる。

◇農業経営：現在40アールの水田を2人の土地所有者（寺院20アールと政府20アール）から借りて小作している。

1975年頃は、小作地は2ヘクタールだったが、1985年頃に宅地化して1ヘクタールに減った。ずっと専業で農業してきたが、3ヶ月前に60アールの水田が宅地として売られたので40アールになった。60アールの土地所有者2人は、ブドゥンガン慣習村のメンバー。2ヶ月前から4アールの空き地に野菜を作って収入源を補おうとしている。毎日収穫すると1日2万ルピアになる。空き地が誰の所有かよく分からない。2ヶ月経つがまだ何も言っていない。子供も独立したし、2人の子供が結婚したら、親の役割は完全に終わる。

◇農作業：耕耘は手押し型トラクターをオペレーター付きで1日80万ルピアでレンタルしている。この耕作に2日間かかる。田植えは、タバナンの日雇い農業労働を40アール20万ルピアで雇用している。7年前から雇用労働力を使うようになった。それ以前は、同じバンジャールの(a)50アールの水田を経営している農民と(b)150アールの水田を経営している農民と本人の3人で協同作業をしていた。本人が100アールだったので、(a)の人は50アール越える面積を賃金で精算し、(b)の人には50アール越える面積の賃金をもらっていた。50アールまでのゴトンヨロンといったところか。

稲刈りは、稲を販売する会社に頼んでいる。以前は、90アールを販売し、10アールが自給用だった。10アールの自給用の分も19万4500ルピア支払って刈り取り作業をしてもらう。会社が、東部ジャワのパニユワギやジュンブルの日雇い農業労働者を雇用している。東部ジャワの日雇い農業労働者は、スバックの水田を借りて野菜を作っているジャワ人ではない。彼らは、パリの賃金が高いことを知っているので、低賃金で雇用できないし、毎日、自分の畑作で忙しい。

◇化学肥料は使うが、農薬はほとんど使わない。1980年代の高収量品種の導入のため、化学肥料を使わないとできない稲になったが、スバックで作業日程が同じなので害虫が少なく農薬を使わずにすむ。化学肥料は欠点はあるが、収量が増え、以前のように米に雑穀を混ぜないで食べられるようになった利点は大きい。欠点としては、土壌が変わってタニシが全くなり、田ウナギが少なくなった。化学肥料よりは、パティック工場の汚水のほうが心配。観光業が盛んでパティック工場が多かった1989年頃が一番汚れていた。朝きれいな水だったのに、翌日の朝は着色した水が流れていることがあった。夜中にこっそり流しているのだと思う。今は随分ましになったが、完全に解決したわけではない。

◇班長とパグリマンの仕事：1975年頃は班長とパグリマンの報酬として20アールの政府の土地を小作できたが、2001年から月10万ルピアの報酬に変わった。スバック長は月20万ルピア。昔の班長は、相互扶助や協同作業の仲介で重要な役割を果たしていたし、尊敬される存在でメンバーはその指示に従っていた。今の班長の役割は、政府や州と言った上からの情報をただ伝達するだけの仕事。水の管理は、設備が整いコンクリートになった現在のほうが楽。

この事例では、妻の農外就労があるし、子供が経済的に独立しているものの、小作地だけの専業農家であるために、1ヘクタールの水田経営で生活してきたにもかかわらず、60アール減少しており、40アールで生活しなければならなくなっている。こうした水田の宅地化に伴う小作の失業問題は、深刻である。つぎクパオン水利組合で、自作地の水田が宅地化した事例を取り

上げてみよう。

【事例3】⁽³⁷⁾

◇対象者の属性：クパオン水利組織の1班の班長兼バグリマン。1930年生78才。小学校（7年制）卒業。1班の班長は父だったが、1970年に父が農業からリタイアして本人に替わったとき、班長の仕事も引き継いで、今に至っている。ブドゥンガン慣習村のバンジャール・ブガワン（Br Begawan）のメンバーだが、1992年に自作地の水田（26アール）だった場所に畜舎と家屋を建てて移ってきた。この場所は、水田が宅地化したところなので、移住者だけが住んでおり、どこのバンジャールでもない。

◇家族と屋敷地：この家屋に住んでいるのは妻（1963年に結婚）と2人。長男（1966年生）は死亡。次男は結婚して妻と子供が3人おり、デンパサール市に住んでいる。畜舎が、この場所にあるので、次男は毎日通ってきて養豚をしている。バンジャール・ブガワンの屋敷地（26a）には、1998年に家を建てて三男夫婦と子供3人が住んでいる。家の寺院があるのはブガワンの屋敷地なので、本人夫婦が住んでいる水田跡地に建つこの家屋の場所を屋敷地とは言えない。三男はガソリンスタンドの仕事をしている。長女と次女と三女と四女は結婚して他出。

◇農業経営：現在は、25アールの水田を小作している。子供が時々手伝いにくるが、中古のトラクターを1台400万ルピアで購入し修理しながら使っているので、基本的に稲作は1人でできる。1970年当時は、自作26アールと小作25アールと班長の報酬として政府の土地25アール計76アールの水田を経営していた。1980年代に自作の水田は水が足りず田植えができなくなったので、畑にしてトウモロコシやパパイヤを作るようになった。次男は稲作ではやっていけないので、1980年頃からバンジャール・ブガワンで養豚をしていたが、畜舎のあった場所が宅地になって養豚ができなくなったため、1992年に自作地の水田に畜舎と家屋を建てて移ってきた。繁殖豚12頭に子豚を生ませ、子豚が3ヶ月14kgになった時に一頭25万ルピアで出荷する。

◇兼業：農業を積極的にやり始めたのは1970年頃からで、それまでは両親が元気で農業をしていたので休日に手伝う程度だった。それまでは、建設会社の会社員（倉庫係）としてグラ・ライ国際空港の建設に従事していた。空港の工事が終わり、別の場所の工事に移るのに単身赴任するしかなかったので、退職して農業することにした。現在、8部屋の下宿を1部屋25万ルピアで貸すアパート経営もしている。借りているのは民間会社の会社員等で皆バリ人。

この事例は、自作の水田が宅地化した事例なので、事例2のような小作の失業とは事情が異なる。事例1や事例2のような専業の農業従事者は、むしろ例外的で、この事例のような兼業農家のほうが一般的であろう。事例1でもそうだが、この地区では、水田稲作よりも、むしろ養鶏や養豚や肥育牛といった畜産や野菜作に農業が傾斜しつつある。水田の宅地化に伴う小作の失業問題は、チュチュラン水利組織でも深刻である。次にチュチュラン水利組織の事例を取り上げてみる。

【事例4】⁽³⁸⁾

◇対象者の属性：チュチュラン水利組織のパグリマン兼秘書。1949年生56才。1班から4班担当のパグリマン（1971年から2006年現在まで）。プモガン慣習村の②バンジャール・パンティ・サリ（Br Panti Sari）のアダット長でもある。小学校中退（6年生の時に風揚げで怪我をして卒業証明書をもらいにいけなかったため）

◇家族：本人と妻（1968年結婚56才）、長男（36才）と長男の妻と長男の子供2人、次男（34才）と次男の妻、次女（30才未婚）の9人家族。長男は大卒で建築家。次男はホテル従業員で2週間前に結婚したばかり。長女（32才）は結婚して他出している。

◇屋敷地：2アールの屋敷地にひとつの家屋。3夫婦家族9人がひとつの家屋と一緒に住んでおり、台所もひとつ。

◇農業経営：2000年までは1.5haの小作だった。土地所有者が宅地として手放すなどして、2000年には農業をする土地がなくなった。現在は経営面積ゼロである。かつては、1.5haの小作地を3人の土地所有者から借りていた。

(a) 50a（3班）は、西デンパサール区のプムチュタン行政村（Desa Pemecutan）のバンジャール・グレンツェン（Br Grenceng）の土地所有者から2000年まで借りていた。(b) 50a（2班）は政府の土地で、1987年までは収穫の全てが報酬だったが、1対1で小作料を払うようになった。1998年まで借りていた。(c) 50a（4班）プモガン慣習村のバンジャール・グヌン（Br Gunung）の土地所有者から2000年まで借りていた。父の代からの小作で2人で農業していた。最初は父がスバックのメンバーだったが、1970年に死亡してからは本人がメンバーになった。それから2000年まで30年間農業をしてきた。最初は1998年に(b)の土地を、政府が道路の補償のために使った民間の土地と交換したので小作ができなくなった。次いで(a)と(c)の土地が宅地化した。下宿にするといった理由などで宅地として土地所有者が手放した。小作に相談はなく、急に農業ができなくなった。農業するための土地がなくなるのは困るが、自分の土地ではないので仕方がない。土地の価格が上がったので納得している。

◇パグリマンの仕事：1班から4班担当のパグリマン。パグリマンはスバック長に次ぐ仕事。水割りの仕事と水路の掃除のコーディネーター、説明会の開催、連絡係り等。以前は、パグリマンの報酬として政府の土地を50a小作していた。2003年からは1ヶ月10万ルピアの報酬になった。パグリマンの一番大切な仕事は、何をいつ植えるかを個々別々ではなく統括する仕事。旧暦にもとづいて、田植えや稲刈り作業の時期を決め、班長をとおしてメンバーに従わせる。従わなければペナルティを科す。先に田植えをすると、苗を抜くし、稲刈り前に青刈りする。このスバックのペナルティは、以前ルールを守らない人がいたため厳しい。水の分配についてのルールとペナルティが最も厳しい。雨期は水が豊富なので問題ないが乾期は問題。ある班が水田だったら、別の班は畑というように田植えの時期が重ならないようにしている。

スバックのメンバーは、決められた同じ時期に稲を育てる。1年に2回収穫できる。1月は雨期で水があるので、スバックのメンバーはどの班も皆一緒に田植えをする。一緒にやるという意味で、クルタマサ（Kerta Masa）と呼んでいる。田植えは15日間の決められた時期に行う。それより早かったり遅かったりすると苗を抜くというペナルティがある。5月（ないしは6月）の田植えは乾期で水が足りないのので、班を2つのグループに分け、1つのグループは田植えで、もう1つのグループは大豆などを植える。2つに分けるという意味で、ガドゥン（Gadon）ないしはガドゥ（Gadu）と呼んでいる。これが、スバックでもっとも大事なルール。本人の担当の1

班から4班の例でいうと、今年の5月は1班・2班が田植えで、3・4班は枝豆。1年に2回収穫できるのは、半分の班だけ。1人のメンバーは、2年に3回収穫できると考える。今は宅地化して土地が少なくなったので水が足りないということがなくなり、全メンバーが1年に2回収穫する場合もある。

スバックの違反で多いのは、決められた時期よりも1日先に田植えをするケース。すぐに苗が抜かれる。違反する理由は様々。旧暦で縁起の良くない日だと思ったり、田植えのスカで人がいなかったり等。バグリマンが罰則を科すかどうか試してみたくてわざと違反した人もいる。記憶に残る違反は、1979年ころに7班（当時は班が7つあった）で田植えの時期を守らない人が1人いた。違反したのに報告がなく、植えてからかなりたって分かったので、皆で青刈りをした。班長も違反を分からなかった。収穫に近い時期なので、もったいないと思い、迷ったが・・・。田植えの時期が15日間と決まっているのは、防虫のため。ある人の田に虫が集中すると困る。鳥害をふせぐためでもある。だから、同じ時期に稲を育てることが重要。

◇これからの仕事：ジャワ人は野菜作りにすぐれているが、本人は稲作しかできない。だが、今は農地があっても小作はやりたくない。土地の質が30年前とは変わって肥料をたくさん使わないと稲にならない。化学肥料が高コストと米の販売金額のつりあいがとれない。30年前はミミズがいる土壌の良い土地だったが、化学肥料や農薬のせいだろう。どんなにがんばっても収穫期には種を買う程度のわずかなお金にしかならないので、今はむしろやりたくない。1996年から朝市の近くに店舗を借りて、ナシゴレンやアヤムゴレンを出す食堂をやっている。店舗の賃貸料は、5年で500万ルピア。売り上げは、1日2万ルピア。

◇②バンジャール・パンティサリ：1971から30年間アダット長をしている。1971年当時は12世帯（KK）だったが、今は34世帯（KK）。結婚してメンバーが増えた。当時は99%が農民で、田植えや稲刈り等農業に関わる協同作業をバンジャールでしていた。朝早く起きて夕方まで農作業をし、疲れてしまって他のことは何もできなかった。農地が宅地化して失業した小作はこのバンジャールでも随分いる。20名くらいか・・・。チュチュラン水利組織全体だと小作の失業者は、多すぎてとても数え切れない。

これらの事例のように、水田の宅地化は、小作にとって失業を意味する。では、土地所有者である地主や自作にとって、どのような意味をもつであろうか。次に、チュチュラン水利組織の土地所有者に目を向けてみよう。

【事例5】⁽³⁹⁾

◇対象者の属性：チュチュラン水利組織のスバック長。1939年生67才。小学校中退。1972年から現在まで、33年間スバック長（任期5年）。ブモガン慣習村の②バンジャール・パンティ・サリ（Br Panti Sari）のメンバーだったが今は隠退。

◇家族：妻（1962年に結婚）が1998年に死亡した。3人の女の子は皆結婚して他出している。今は、長男（1965年生）と長男の妻と長男の子供2人の5人と住んでいる。お手伝いさんが1人いる。妻が死亡し、子供が皆結婚しているの、今は長男夫婦の世帯（KK）にはいつている。アダットの宗教生活で果たす妻の役割は大きいので、ひとつの独立した世帯（KK）を維持するのは負担が大きい。屋敷地13アール。父の土地だったが、1990

年に家屋は建て替えた。

◇農業経営：2ヘクタールの水田を自作していたが、2000年に1.5ヘクタールの水田を全て小作に出した。a) 80アールb) 45アールc) 25アールの3人の小作がいる。a) は3班にある水田で、ジャワ人の小作に年300万ルピアで貸している。ジャワ人の小作は、畑にして野菜を作っている。3班の水田は、現在では、ほとんど畑地として使われている。b) は、4班にある水田で、バリ人の小作に（事例6）、地主1対小作2の小作料で貸している。c) 25アールは、クバオン水利組織にある水田で、b) と同じ小作人に貸している。小作に出したのは、年をとり、農業の後継ぎがいなかったため。若い人は農業をやりたがらない。

小学校を中退して1954年から父が亡くなる1963年まで、父と二人で2ヘクタールの水田を自作してきた。1963年にスパックのメンバーになり、以降、妻と2人で2000年まで2ヘクタールの自作地を耕作してきた。2000年に父が所有していた土地4.5ヘクタールを3人の兄弟で遺産分けした。父には妻が3人おり、腹違いの兄弟で男子が3名。2ヘクタールのうち0.5ヘクタールは他の兄弟のものになった。

兼業：11.2アールの土地（お寺の土地。本人はスードラの司祭でもある）で下宿経営をしている。60部屋あり月500万ルピア。長男は、2004年からバンジャールのディナス長。カフェを経営（自営業）しており、従業員は23名。月5千万ルピアの販売金額。爆弾事件以降客が少なくなった。

◇作付けの時期とスパックの系統：雨期は12月～2月で、この時期に水不足を避けてスパックが一斉に田植えをして稲作（クルタマサ）をする。この時期は、畑作には向かない。12月に田植えをし、3月が稲刈り。3～4月にうちにガドゥを決定し、メンバーがよく通る場所の黒板で通知する。半分の班が6～7月に田植えをし、10月に稲刈り。11月と12月は田を休ませる。このスパックでは、水不足の心配はないが、2年に4回の収穫はめったにしていない。土地の保全のためにも休ませる必要がある。スパック長が単独で判断できることもあるが、バリ州のスパックは、州知事（Gubernurグブルヌル）→第2級地方行政区レベルの水利組織の長スダハン・アグン（Sedahan Agung）→第3級地方行政区レベルの水利組織の長スダハン・イエ（Sedahan Yeh）→プカセ（Pekaseh スパック長）というように系統的に組織されていて、様々な通達が降りてきて、説明会が開かれる。

◇メンバーシップ：スパックのメンバーは、デサやバンジャールとは基本的に関係ない。土地所有者はプロマンガ村の周辺の人が多いが、小作人は東部ジャワのバニユワギのジャワ人もかなりいる。ジャワ人は水田を借りて、畑にして野菜を作っている。このスパックでは、バリ人は水田での稲作、ジャワ人は畑で野菜作をしている。1対2の小作料を払うバリの小作人と違って、ジャワ人は1年いくらかという契約で水田を借り、畑にして使っている。稲作の水利とは関係がなくとも、スパックが管理する農地を小作している限り、ジャワ人もスパックのメンバーとしての義務を果たさなければならない。バリ人も、ジャワ人もスパックのメンバーとしては同格。土地所有者がスパックのメンバーになるのは、自作の場合だけ。自作と小作の両方がスパックにはいることはない。現在、チュチュラン水利組合のメンバーは、①土地所有者である自作農のバリ人②小作農のバリ人③小作農のジャワ人から成る。

◇ルールとペナルティ：メンバーの義務は、様々な規則を守ること。12月中に田植えしない者は罰金1万ルピア。播種の時期も1週間で守れない者は1万ルピア。一番厳しい規則は、ガドゥを守ること。ガドゥは、罰金ではな

く、村八分。精神的につらい懲罰。作業を同じ時期にするのは、害虫をふせぐためだが、稲を販売しやすいし、農業日雇い労働も得やすい。農業日雇い労働は、個人で雇用する場合もあるし、グループで頼むこともある。土地を1年契約でジャワ人に貸して畑にするか、バリ人に貸して水田稲作をするかを決めるのは、土地所有者の完全な自由。だが、どちらのかたちでも、借りる人はスバックの規則を守らなければならない。野菜を作りたいくても、借りている水田がガドゥにあたる時期は、稲作をしなければならない。クルタマサの時は、稲作をしなくても良い。だが、実際には、ジャワ人が多く借りている3班の農地は、ガドゥのない野菜専用の農地になっているので、ジャワ人の小作人に科せられる義務は、用水路の掃除ぐらいである。掃除を休むジャワ人はいない。もともとジャワ人は勤勉である。用水路の掃除の時期は、各班で別々。班長が決めて、スバック長に連絡する。1990年代は、水路がコンクリートではなかったので、1ヶ月2回だったが、今は1回。欠席の罰金は、1回2000ルピア。罰金の金額は安い、水をもらうのが恥ずかしくなるという精神的な負担があるため、ほとんど欠席はない。

以前は、会費の代わりに収穫した稲を1束スバックに収め、スバック寺院の儀式や祭礼に充てられていた。今はそういうことは全くない。スバック寺院を担当する司祭はいるが、地方財務局が報酬（月10万ルピア）を払っている。スバック長の報酬（月20万ルピア）や班長やパグリマンの報酬も地方財務局が払っている。

自作をしていた頃から自家飯米は買っている。1880年頃からバリの在来種ではなく、政府の決めた品種になり、食味が悪くなった。以来、米を作って販売しているが、自分で食べる米を購入している。今は、野菜も水も全て買っている。バンジャールの協同作業も、この頃からなくなった。スバックも変わったが、バンジャールも変わった。当時は、自転車は高級品だった。

見てきたように、チュチュラン水利組織では、スバック長もパグリマンも、現在、実際に農業をしているわけではない。次に、現在、実際に水田稲作をしているチュチュラン水利組織のメンバーに話を聞いてみた。

【事例6】⁽⁴⁰⁾

- ◇対象者の属性：チュチュラン水利組織のスバック長の農地の小作。生年不詳57才ぐらい（子供の頃父が亡くなりその後母も亡くなったのはっきりしない）。子供の頃から小作で働いていた。文字の読み書きができない。ブモガン慣習村の⑩バンジャール・グヌン（Br Gunung）のメンバー。
- ◇家族：妻が死亡し、本人と長男と長男の妻と孫1人の4人家族。長男はクタのレストランで料理人をしている。給料は月30万ルピアだが、サービス料で3倍くらいになる。
- ◇農業経営：チュチュラン水利組合の小作85aを2人の地主から借りている。(a)スバック長から45a、(b)同じバンジャールの地主から40a借りている。(b)は随分前から借りている。クパオン水利組合の小作25アールも含めると110アールになる。85アールの水田の稲作販売金額は、1回目810万ルピア+2回目720万ルピアで1700万ルピア。小作料が、小作：地主 2対1なので、1回目540万ルピア+2回目480万ルピアで手取りは1020万ルピア。コストは、40a当たりで、トラクターレンタル料32万ルピア 雇用労働力16万ルピア肥料11万ルピアで合計59万ルピア。

慣行農法なので農薬は使わない。

◇農作業：耕耘は、長男と2人でやっている。長男は夕方からの仕事なので朝昼は農業できる。田植えは、農業雇用労働力を使っている。40a当たり4名×1日。1a当たり4000ルピア。本人は監督し、おやつやコーヒーを準備する。草取り（除草）と追肥は、本人と長男でやっている。水管理は本人がやっている。稲刈りは、収穫時期になると業者が面積で買い取り収穫してしまうので、稲刈り作業はない。今年は1a当たり8万ルピア。去年は1a当たり10万ルピアだった。同じ時期に収穫が重なり質が良くなかったので安かった。

◇バンジャールでの協同作業：昔は稲刈りをしていた。収穫の喜びはなくなったが、今は楽だし、すぐお金になる。昔は3日間かかった。稲刈りのスカ（seka）⁽⁴¹⁾があった。スバックとは関係なく、バンジャールのメンバーで協同作業をした。⑩バンジャール・グヌンには、2つの稲刈りスカがあった。ひとつは20名のスカ。もうひとつは25名のスカ。2つのグループの分け方は、目標とするものの違い。20名のスカは自転車が好きの人が集まり、25名のスカはランプが好きの人が集まる。稲刈りの販売金額を集めて20台分の自転車を購入し、皆で分けた。本人はランプのグループ。電気がない時ランプは貴重だった。家族から1人出る人もいれば2人出る人もいる。ランプが2つ欲しければ2人で。自作も小作も混ざっており、全員チュチュラン水利組織のメンバー。昔は田植えスカもあり、面積に関係なく協同作業して、田植えした量を測っておいて収穫時にお金で調整した。スバックの班の仕事は今は水路の掃除だけだが、昔はネズミの駆除等いろいろあった。

かつては、バンジャールを単位とする様々な稲作の協同作業が行われていたことは、よく耳にする。以下の事例7のバンジャールでは、ランプは欲しいグループ（15名）と自転車が欲しいグループ（25名）と洋服が欲しいグループ（20名）と鋤が欲しいグループ（30名）という4つのスカに分かれ、稲刈りの協同作業を行っていた。

【事例7】⁽⁴²⁾

◇チュチュラン水利組合の小作。65才。西デンパサール区のダウ・プリ・カウ行政村にあるバンジャール・アビアン・ティンブル（Br Abian Timbul）のメンバー。小学校中退。

◇家族：本人と妻（60才）と未婚の次男（32才）の3人。12aの屋敷地には家屋が4つあり、①本人夫婦と次男の3人②長男（38才）夫婦と孫2人の4人③長女夫婦と孫1人の3人④次女夫婦と孫3人の5人という4家族15人が住んでいる。妻は野菜売りをしている。長男は朝市の駐車場の管理。長男の妻は衣類メーカーに勤めている。長女の夫も衣類メーカーに勤めている。長女は仕立ての内職。次女も次女の夫も仕立ての内職をしている。

◇農業経営：水田50aの小作（祖父の代からの小作）。畜産（肉牛6頭）もしている。

稲作の販売金額は、去年は1回目1a当たり8万ルピア、2回目は1a当たり10万ルピア、今年の1回目は1a当たり7万5千ルピア。コストは、50a当たりトラクターレンタル料40万ルピア、雇用労働力40万ルピア、肥料14万ルピア、農薬1万7000ルピア合計95万7000ルピア。肥育牛は、安くても1年1000万ルピア（牝300万ルピア牝150万ルピア、年間6頭は出荷している）。

この事例でも、畜産が行われている。デンパサール近郊農村では、コストに対して米価が

安く割に合わない稲作よりも、畜産や野菜作が有望になっている様子が伺える。なお、この事例の家族は、③長女夫婦と④次女夫婦が住んでいる家屋の屋敷地（各1a）は、娘に贈与されている。長男と次男は、本人の死後10アールの屋敷地を各5アールずつ相続することになるので、現在の長男が居住している家屋の屋敷地を長男の所有にしているわけではない。所有権は、娘の夫ではなく、娘自身の名義。下宿を借りるより、土地があるのだから娘にも財産を贈与するのは、父系の男子均分相続とは異なる「新しいやり方」と言われている。本人に他の男の兄弟がなく、屋敷地の権利を持っているのが本人1人だからできたことと説明される。

最後に、チュチュラン水利組織ではかなり一般的な兼業が主である農民を取り上げておこう。

【事例8】⁽⁴³⁾

◇対象者の属性：1班の班長。1942年生64才。プドゥンガン慣習村のバンジャール・ブガワン（Br Begawan）のメンバー。小学校中退で文字が書けない。6ヶ月で父が亡くなり母が再婚したので、叔母（母の妹）が世話してくれた。義叔父（叔母の夫）と一緒に1957年（15才）から農業をしている。1971年からスバックのメンバーになり、同時に班長になった。

◇農業経営：小作85a。農業は、1990年にやめているが班長の仕事は今もしている。①20aは、政府の土地。1971年から75年までの4年間小作していた。政府がサッカー場を作るために手放し代替地をもらったが、タバナン県に近いところであまりに遠く使っていない。2003年から班長の報酬として1ヶ月5万ルピアもらうようになり、2004年から10万ルピアになった。②65aは代々の小作。地主はバドゥン市場に近いバンジャール・プムルガン（Br Pemergan）の人。1990年に周辺の土地が宅地化して水がはいらなくなり農業できなくなった。

◇兼業：小さな頃から大工もしてきた。田の仕事は毎日あるわけではない。農閑期は午前は農業、午後は大工。夕方5時に大工が終わった後、田に水が流れているのを確認して帰る。大工の兼業は多い。生活できないからという理由よりも、農閑期の時間の活用という意味が大きい。2週間大工の仕事をして、草取りの仕事が必要な時は2日間休みをもらう。大工は1週間だけ仕事をしてもお金がもらえる。田は1年間仕事をしないとお金がもらえない。大工の賃金は、10～15年前は1日1万5000ルピア、今は6万ルピア。農業1に対して大工2ぐらいで、大工の収入のほうが農業よりも多かった。農業収入は種苗を買ったり、貯金にまわす。農業はいつでもお金になるとは限らない。昔はバリのお米は1年に1回しか収穫できなかった。駄目になると1年の収入がふいになった。チュチュラン水利組織のメンバーは、ほとんど兼業。事例7の小作も建設土木の日雇い労働の兼業をしているし、事例8も妻の野菜売りを手伝っている。

8. おわりに

以上、プモガン行政村にある2つの水利組織（スバック）の構成員への聞き取り調査をとおして、水田の宅地化が甚だしいデンパサール市の農民の今日的様態が明らかにされた。今日のプモガン村の農民の生活様式は、成員の主な生業が農業だった頃とは、大きく変貌していた。かつてはバンジャールを単位に行われていた田植えや稲刈りの協同作業は解体し、低賃金の農業雇用労働にとって代わられていた。スバックとバンジャールが1対1の対応関係をもたない別組織であることは間違いない。だが、バンジャールの成員の多くが農業をしていた頃は、プモガン村では、バンジャールにあるいくつかのスカ（インフォーマルな任意団体）が農業の協同労働の単位になっていた。こうした協同作業が、共に働き、収穫の喜びを共有することで、近隣組織であるバンジャールの住人との間にある種の紐帯を培う役割を果たしていたことは間違いない。今日では、田植えの作業は日雇いの雇用労働力に代われ、稲の収穫は、作業も管理も、生産農民の手を離れて、出荷業者に完全に任されるようになった。

農民の生活様式の変貌も甚だしい。かつての自給的な農業は影を潜め、稲作農民は販売用の米を生産しても、自家飯米は購入している。こうして販売された米の代金は、米や野菜をはじめ、ペットボトルの水から儀式のためのお供え物に至るまで、生活のために必要な商品の購入に充てられる。

こうした変化の背景のひとつとして、ツーリズムよりも先に、スハルト政権下での米の増産政策の強い影響をあげておかねばなるまい。在来種から高収量品種への転換は、単位面積当たりの収穫量を飛躍的に増大させた。このことは、化学肥料と農薬を使う近代化的な農法への転換を意味し、土壌や水や生態系に大きな影響を及ぼした。手押し型トラクターの普及とも合わせて、近代農法は、水田稲作のコストを大きくひきあげた。協同作業の解体に伴う雇用労働力の人件費を合わせると、米価の低迷とあわせて、今日では水田稲作は農民にとって割に合わないものになっている。ツーリズムは、こうした農業離れに一層の拍車をかける。ホテルや飲食店の従業員、運転手や警備員といった観光関連の様々な就業機会があるなかで、水田稲作は、とりわけ若者にとって魅力の乏しいものになっている。

ツーリズムは、就労機会を創出し、プモガン村に急速な人口増をもたらした。こうしたなかで、水田の宅地化が進み、土地の価格が急増している。本稿のもとになった現地調査からは、こうした変化が、土地所有者である自作農と小作農とで、全く異なる効果を及ぼしていることが明らかにされた。地価の上昇は、土地所有者にとっては、貸間や賃貸アパートの経営、道路沿いの飲食店や各種の店舗の賃貸や経営等、利殖の機会を得ることにつながる。だが、スバックのメンバーの圧倒的多数を占める小作人にとっては、農地の宅地化は、失業を意味する。なかでも、専業の小作農にとって、事態は一層深刻である。バリ人は農業を嫌って農地を手放し

ているという一般的な言説のなかで、専業の小作農の窮状は、必ずしも農業をやりたくないからではなく、農業をやりたくてもできない状況が生じていることを語っている。

また、農業で生活しようとする場合は、水田稲作ではなく、畜産や野菜作が中心となる。畜産や野菜作は、水田稲作のように、水の分配を中心に、作業時期の調整や用水路の掃除等の共同のルールを必要としない。畑作や畜産は、基本的には個人の仕事である。それゆえ、プモガン村に農業は残っても、水田稲作の減少ないしは消滅は避けられない。こうした変化は、水利組織のみならず、バンジャールや慣習村をはじめ地域住民組織に大きな影響を与える。

今日のバリ人の生活様式は、生産と消費の両面にわたって根底のところまで変質し、これまでの生活との連続性を断ち切るような大きな変化の局面を迎えつつあるように思われる。スバックの農民の水田に流入し続ける大量のプラスチック・ゴミは、何よりも彼ら自身の生活様式が変化したことへの現れにほかならない。パティック工場の汚水は、イスラム教のジャワ人というエスニシティを異にする移住者の問題というよりは、農民だけではなく、会社員や公務員、ホテルの従業員、建設業や製造業の労働者等々、様々な職業の人々が混住するようになった混住地域の問題にほかならない。

伝統文化を、古来から変わらぬものではなく、状況変化に対応して不断に変化する人々の生活様式と規定するならば、今日のバリの人々の伝統文化は、グローバル・ツーリズムの下で、植民地化や国民国家化という状況変化に適応しながらある種の連続性を保持してきた域をはるかに超えて、これまでの生活様式とは質的に異なる断絶の局面を強く押し出しているように思われる。

本稿は、プモガン村の住人の中でも、水利組織のメンバーに焦点をあてて、水田稲作を主な生業としてバリに代々生活しているヒンズー教のバリ人の生活様式が、グローバル・ツーリズム下でどのように変化しているかを考察した。今日のプモガン村は、ヒンズー教のバリ人だけではなく、代々この地で生活してきたイスラム教のバリ人や、イスラム教の非バリ人の移住者といった多様な住人から構成されている。ヒンズー教のバリ人は、バリ社会ではマジョリティであるが、多民族国家インドネシアの中ではマイノリティである。こうした状況の中で、バリ社会の中ではマイノリティでも、インドネシア国家の中ではマジョリティであるイスラム教のジャワ人が増加することは、国民国家の中のマイノリティとしてのバリ人の危機意識を、否が応でも高めることになる。2002年の爆弾テロ後の「アジェク・バリ Ajeg Bali」というバリ固有の伝統文化の固持を主張するスローガン⁽⁴⁴⁾は、こうした危機意識のひとつの現れであろう。

多様なエスニシティに属する住人から構成されるプモガン村の考察は、多民族国家インドネシアのマジョリティとマイノリティが複雑に交錯するグローバル・ツーリズム下のバリ社会の潜在的な緊張関係を明らかにし、宗教や言語や国家や民族の意味をあらためて問うことにつながる。ヒンズー教のバリ人という地元民側からの視点だけではなく、宗教の異なる非ヒンズ

一教のバリ人や、非ヒンズー教の非バリ人という移住者の側にも視点を据えて、プモガン村の変動のダイナミックな動態を描き出すことが、次なる課題である。

注

- (1) インドネシアの地方行政組織は、州（Propinsi 第1級地方行政区）―県（Kabupaten 第2級地方行政区）―郡（Kecamatan 第3級地方行政区）―村（Desa）―集落（バンジャールBanjar、ジャワのRT・RWに当たる）から成る。デンパサール市は、県と同格の第2地方行政区であり、西デンパサール区と東デンパサール区と南デンパサール区という3つの区（Kecamatan）から成る。プモガン行政村（Desa Pemogan）は、南デンパサール区の10の村デサ（Desa）ないしは町クルラハン（Kelurahan）の中のひとつである。
- (2) 1969年の外国人観光客数は、山下、1999、80頁参照。
- (3) バリ島の人口増加とバリ島南部の都市化の進展については、吉原、2006、54-56頁参照
- (4) キブン（KIPEM）とは、Kartu Identitas Penduduk Musiman（季節滞在者の身分証明書（IDカード））の略。今日では、一時滞在者の身分証明書は、Kartu Identitas Penduduk Pendetang（転入人口証明書）の略のKIPPに名称が代わっている。
- (5) バリ島民が農業ないしは水田稲作を主な生業とする農業社会であるという見解は、かなり一般的である。例えば、吉田、1992、42～47参照。だが、耕地中に占める水田の比率は、畑地や農園に比べて必ずしも高くない。なお、この点については、1960年の第二次東南アジア稲作民族文化総合調査で、バリ島の稲作と農業を分析した藤岡保夫の見解が参考になる。藤岡は、当時のバリ島の全面積中水田17%畑地28%農園16%森林22%その他17%と、耕地の中で水田の占める比率は必ずしも高くないことの理由を、次のように説明している。バリ島は、単位面積当たりの人口密度が高く、食料自給を高めるために耕地の開拓率が67%と世界的にも高く、灌漑用水が不足している。それゆえ、耕地中の水田の占める割合が必ずしも高くないのは、水不足によるもので、バリ農業に占める水稻の位置が低いかからではないと説明している（藤岡、1968、108-109頁）。
- (6) インドネシアにおける「緑の革命」は、ビマス（BIMAS）、インマス（INMAS）、インスス（INSUS）と称される米の自給を目指した増産運動である。この結果、1984年には、米の最大の輸入国だったインドネシアが、自給達成を宣言するに至る。ビマスやインマスの概要と、それに伴うインドネシア農業の変化については、加納、1988、第3章参照。
- (7) 灌漑については、バリでは900年以上前から確認されるサブク（Subak）と呼ばれる水利組織の存在が知られており、灌漑率が99.9%と非常に高く、天水田は1%にすぎない。『バリ統計書2004/2005』によれば、2004年の水田面積8万2053ヘクタールのうち6万8648ヘクタール（83.7%）は「半技術的灌漑（Pengairan Setengah Teknis）」であり、7662ヘクタール（9.3%）は「公共事業による簡易灌漑（Pegarian Sederhana Pekerjaan Umum）」であり、4926ヘクタール（6.0%）は「伝統的灌漑（Pengairan Tradisional）」であり、灌漑を全くしていない天水田は817ヘクタール（1.0%）である。

- (8) 以下は、JICAの国際協力専門員羽鳥祐之氏からの聞き取りによる。
- (9) マングローブ情報センターのゴミ問題については、羽鳥、2004で論じられている。羽鳥は、この論文の中で、センターのマングローブ林は、海洋を陸地の汚染から守るという環境保全機能をここで十分に発揮し、デンパサール市内から漂流したゴミが海に流れるのをせき止める働きをしているとアイロニカルに述べている。
- (10) ワークショップについては、JICA2001参照。
- (11) バリ・フォーカス（環境問題に取り組むバリのNGO）の協力で実施したプモガン村を対象とする固形ゴミ管理の調査については、JICA2002-2003参照。ゴミの内容の内訳は、JICA2002-2003、19-22頁参照。
- (12) この時、プドゥンガンはデサ（Desa）からクルラハン（Kelurahan）になる。
- (13) インドネシアでは、KKという略語で表す家族長（Kepala Keluarga）を、人口登録や住民登録の単位とし、また各種の社会調査の統計上の単位として用いている。それゆえ、本稿では、KKを世帯と訳し、世帯数を表す用語と理解した。だが、インドネシアの家族長（KK）は、結婚してはじめてひとつの家族（KK）に数えられるため、既婚の夫婦家族を指している。つまり、KKは、日本の世帯や世帯主という用語とは異なり、同一の住居で起居し生計を同じくする者の集団を指しているわけでは必ずしもない。1組の夫婦からなる核家族はひとつのKKに数えられるが、単身者のKK（＝単身世帯）は原則として存在しない。日本に多い三世代同居の直系家族は、インドネシアでは、夫婦の両方が健在である限り、同居して生計をとともにしていても2KKに数えられる。未婚者は、出身地を離れ、居住を共にしない他出者であっても、両親のKKに含まれるか、現居住地の大家や身元引受人のKKに含まれる。つまり、結婚してはじめて独立したKKと数えられることから、1組の夫婦のKKに、夫婦の未婚の子供以外でも、家族長が身元をひきうけた親族や下宿人や同郷人や従業員が含まれることがある。日本の住民票や国勢調査の単位である世帯が、居住本意であるのに対し、インドネシアの法制度上・統計上の単位であるKKは、いわば婚姻本意である。
- バリでは、男性が結婚することによってはじめてバンジャール・アダットや慣習村の成員となり、結婚した1組の夫婦が、バンジャールや慣習村の様々な義務と権利を果たす最小の単位と見なされる。それゆえ、多民族国家インドネシアの法制度上・統計上の単位であるKKは、多様な民族のひとつであるバリのアダット（慣習）上の最小単位とうまくかみあい、こうした単位をうまくひろいあげられるかたちになっている。
- バリでは、1組の夫婦家族（KK）が、ひとつの家屋に住んで家計をとともにする場合が多いが、ひとつの家屋に複数の夫婦家族が居住することも少なくない。こうした場合でも、台所や食事を一緒にし、家計をとともにしているとは限らない。ここでは、世帯と訳出した家族長が（KK）が、日本の世帯とは異なり、こうした内実をもつカテゴリーであることを注意しておきたい。
- (14) アダットとディナスの二層構造それ自体は、オランダ植民地時代の植民地行政に端を発するもので、バリのみならずインドネシアに共通のものである。インドネシアの社会学者セロ・スマルジャンは、アダットを、特定の範域で、数世紀にわたって生活してきた人々が共同の利害関係をとおして発展してきた村落コミュニティの生活様式であるとしている。つまり、アダットとは、単なる伝統ではなく、個人とコミュニティ

とのあいだの関係を支配し、家族生活の指針を示し、個人間および集団間の諸関係の当事者が負うべき責任を定めた包括的な意味をもつインドネシア語であるとしている。セロ・スマルジャンは、ローカルなアダットが、エスニック集団ごとに大きく異なるとしている。セロ・スマルジャンによれば、ジャワのアダットは、ある範域の中に居住する者であれば、エスニックな出自にかかわらずコミュニティの成員として受け入れ、他の村民と同等の権利と義務を与えるとされる。これに対して、ジャワ以外の他の島々では共通の祖先から生まれたと考えられる出自志向の強い社会関係が支配的であり、外部の者からは見えにくいテリトリーを持ち、テリトリーの外部の成員に対しては排他的であり、一方、テリトリーの内部の成員に対しては、成員が範域の外に移動したとしてもあくまで成員であり続けると述べている。セロの主張が、ジャワ島以外の島々を、出自志向の強いクラン（氏族）として一括している点については疑問があるが、アダットの多様性を強調し、アダットが必ずしも居住中心主義ではない地域ないしはエスニシティもあるという主張は留意すべきであろう。パリの慣習村（Desa Adat）は、近年、バリ語でデサ・パクラマン（Desa Pakraman）と称されるようになったが、これもまた、国民国家インドネシアの中のマイノリティとしてパリの固有性を主張しているとする運動のひとつの現れであろう。

- (15) バンジャールについては、吉田、1994、48—50頁参照。
- (16) カンプン・イスラムを独立したアダットと見なすと、1つの行政村の中に3つの慣習村があることになる。カンプン・イスラムの人々は、プモガン行政村には3つの慣習村があると主張し、ヒンズー教のバンジャールの人々は2つと主張する。慣習村の数という「客観的」な事実の認識に、立場の異なる住人の間の見解の相違が現れることは、本稿の関心から見て興味深い。
- (17) プモガン慣習村については、2005年6月の実施した慣習村長（ブンデサ **Bendesa**）からの聞き取りによる。
- (18) この3つの寺院を共同で祀っているのは、パリの慣習村のきわめて一般的な特徴である。この点は、吉田、1992、67頁、鏡味、2000、31頁、間苧谷、2000、163—169頁参照。
- (19) 2001年の慣習村に関する新たな州条例については、鏡味、2006、107頁参照。鏡味は、スハルト退陣後の「地方自治」の時代における地方行政機構に関する一連の改革のなかで、慣習村の担う役割が行政の領域に踏み込み、慣習組織が行政機構に取り込まれつつあると分析している。
- (20) プモガン慣習村の役職は、慣習村所蔵資料 *Eka Ilikita Desa Pakraman Pemogan* 2005、52頁参照
- (21) プモガン慣習村の会計については、2006年10月に実施した会計担当者からの聞き取りと慣習村所蔵資料による。
- (22) パリの暦については、吉田、1994、25—27頁、中村、1994参照。
- (23) 参考までに、2006年10月時点でルピアを円に換算すると、1円が約77ルピアで、1000ルピアは約13円である。
- (24) クパオン慣習村については、2005年12月と2006年10月に実施した慣習村長（**Bendesa**）からの聞き取りによる。なお、会計については、2006年10月に実施した会計担当者からの聞き取りと慣習村所蔵資料による。
- (25) スバックの歴史とアウィグ・アウィグについては、石田参照。
- (26) この点については、吉田、1992、74—75頁、間苧谷、2000、162—163頁参照。

- (27) チュチュラン水利組織の概況については、Monografi Subak Cuculan 1994とスバック長からの聞き取りによる。
- (28) クパオン水利組織の概況については、Monografi Subak Kapaon 1996、2002とスバック長からの聞き取りによる。
- (29) バティックについては、関本照夫、1995、2000、及び中田ゆう子ホームページ(<http://www/batik-yuko.com>)参照。
- (30) 1980年代以降、バリでバティック工房が増えたのは、観光客を対象とする販売というよりは、むしろ輸出向けの生産と加工のためである。ツーリズムに伴いバリは、今日では、バティックだけではなく、さまざまな物流の拠点や貨物の集散地になり、輸出用の生産や加工、最終的な仕上げと販売の拠点になってさまざまなビジネスと雇用機会を創出している。この点については、吉原、2006、54頁参照。
- (31) 稲や水田の生物への被害は、必ずしもバティック工房だけではなく、高収量品種の導入に伴い、化学肥料や農薬を使う農法に変わったこととも無関係ではあるまい。だが、化学薬品の廃液が、動植物や人体に与える影響は深刻な問題である。事態の解決のためには、明確な原因解明とともに、行政村レベルの対応に止まらない、市や州政府、インドネシア政府による原因究明と法制度による抜本的な解決を図ることが望まれよう。
- (32) Monografi Desa Pemogan, 1992, 1995, 1999, 2003, 2005、及びプモガン行政村役場所蔵資料による。なお、バリ州では、慣習村コンテストや水利組織コンテスト、畑地組合コンテスト、青年団コンテストといった様々な慣習組織コンテスト及び行政村コンテストが開催されている。モノグラフは、各種コンテストに提出するための各種組織の概要である。慣習法の成文化は、慣習組織の法的認可の基本要件であるため、州政府は、各種の慣習組織のコンテストに参加する団体に、それぞれの慣習法を成文化するよう指導している。このため、慣習村や水利組織の慣習法や概況をモノグラフをとおして知ることができる。だが、モノグラフは、コンテストに参加した年度だけ作成されるので、定期的に変化を追うことはできない。
- (33) 表10や表11の産業部門就業人口のように、バリの就業人口についての統計は、実数が示されていないかったり、欠落している年次が多い。また、就業人口の定義が不明確な場合もあり、統計的に信頼できる就労状況の把握は難しい。
- (34) 2005年6月15日、12月25日、2006年8月20日の聞き取りより。以下、聞き取りの対象者の名前は全て仮名である。
- (35) 桐山昇等は、「緑の革命」と総称される農業近代化政策の遂行によって、稲作にコストがかかるようになり、共同体的な慣行が否定されて、土地所有者が特定集団に一括して刈り入れ作業を請け負わせる風習が農村部に広まり、貧困層が農作業から事実上排除されるようになる過程を、「緑の革命」下の東南アジアに共通して見られる現象と説明している（桐山・栗原・根本、2003、246-247頁）。
- (36) 2005年12月25日、2006年8月20日の聞き取りより
- (37) 2006年8月20日の聞き取りより

- (38) 2005年12月28日、2006年5月6日の聞き取りより
- (39) 2005年6月14日、12月28日、2006年8月26日の聞き取りより
- (40) 2006年5月4日の聞き取りより
- (41) スカ（seka）とは、団体、集団、組合を意味する語で、バリ社会にあるインフォーマルな任意加入の団体を指す。スカについては、間苧谷、2000、及び吉原等、2005、157-158頁参照。
- (42) 2006年5月4日の聞き取りより
- (43) 2006年5月7日の聞き取りより
- (44) 中村潔によれば、バリの地方メディア『バリ・ポスト』を中心に、近年、外からの悪影響に対してバリを守り、バリを維持していこうという意味の「アジェグ・バリ」の言説が、バリで流布している（中村、2006、309頁）。

参考・引用文献

- 石川隆 1978「バリ島におけるスバク組織」『南方文化』第5号、天理南方文化研究会
- 鏡味治也 2000『政策文化の人類学』世界思想社
- 2006「地方自治と民主化の進展」『現代インドネシアの地方社会』NTT出版（杉島敬志・中村潔編）
- 加納啓良 1988『インドネシア農村経済論』勁草書房
- 2004『現代インドネシア経済史論—輸出経済と農業問題』東京大学出版会
- 桐山昇・栗原浩英・根本敬 2003『東南アジアの歴史』有斐閣
- 関本照夫 1995「インドネシア近代のバティック産業の事例」『総合的地域研究』第10号
- 2000「周縁化される伝統」『民俗学研究』65巻3号、日本民族学会
- 中村 潔 1994「付録バリのカレンダー」吉田禎吾監修『神々の島バリ』春秋者
- 1999『「開発」と「文化」—バリにおける伝統的土地権と近代化』『土地所有の政治史』風響社（杉島敬志編）
- 2006「改革期バリの地方メディア」『現代インドネシアの地方社会』NTT出版（杉島敬志・中村潔編）
- 羽鳥祐之 2004「プロジェクトが成功しないわけ（1）—伝統のゴミはどこに流れる」『熱帯林業』60号
- 藤岡保夫 1968「バリ島の水稲作とその儀礼」宮本延人編『バリ島の研究』東海大学出版会
- 間苧谷栄 2000『現代インドネシアの開発と政治・社会変動』勁草書房
- 山下晋司 1999『バリ観光人類学のレッスン』東京大学出版会
- 吉田禎吾編著 1992『バリ島民』弘文堂
- 吉田禎吾監修 1994『神々の島バリ』春秋者
- 吉原直樹 2006「Urban Banjar の一存在形態—デンパサール市のある事例分析から」『ヘスティアとクリオ』第3号、コミュニティ・自治・歴史研究会

吉原・伊藤・菱山・斎藤「バンジャールの組織的構成と機能」『東北大学文学「研究科研究年報」54号、2005

Adrin Vickers 1989 Bali: A Paradise Created, Penguin Books Australia (中谷文美訳『演出された「楽園」』2000年, 新曜社)

Bali Dalam Angka

Denpasar Dalam Angka

Eka Likita Desa Pakraman Pemogan 2005

Mangrove Information Center 2001 Workshop on Rubbish Problem JICA

Mangrove Information Center 2002-3 Solid Waste Management Survey in Desa Pemogan

Denpasar City-Bali JICA

Monografi Desa Pemogan, 1992, 1995, 1999, 2003, 2005

Monografi Subak Cuculan 1994

Monografi Subak Kapaon 1996, 2002

Selo Soemardjan and Kennon Breazeale 1993 Cultural Change in Rural Indonesia : Impact of Village Development, Sebelas Maret University Press (中村光夫監訳『インドネシア農村社会の変容ースハルト村落開発政策の光と影』2000, 明石書店)

付記

本研究は、平成16～19年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(A)(1)『『ポスト占領体制』期地域住民組織の比較・歴史社会学的研究』(課題番号16203029 研究代表者・吉原直樹)の研究成果の一部である。現地調査にあたっては、研究協力者のイ・マデ・センドラ氏(ウダヤナ大学日本研究センター長)、ニ・ネウガ・スアルティニ氏(シガラジャ教育大学外国語学部専任講師)、イ・マデ・ブディアナ氏(ウダヤナ大学文学部専任講師)、イ・カデ・アンタルティカ氏(シガラジャ教育大学外国語学部専任講師)には大変お世話になった。JICAの専門協力員羽鳥祐之氏をはじめ長時間にわたる聞き取り調査に応じていただいたブモガン村の多くの方々にも、心から感謝申し上げたい。

The Increase of Immigrants and Disorganization of the Traditional Way of Life in the Period of Global Tourism in Bali, Indonesia: A Case Study of *Desa Pemogan* in the Suburbs of Kota Denpasar

NAGANO Yukiko

(Department of Community and Social Environment, Faculty of Literature and Social Sciences)

The purpose of this paper is to examine the change of Bali society in the period of global tourism. Tourism has created employment opportunities and created an increase of population in Bali society. Today, other than Hindus who speak Balinese, many people of various ethnic groups who have immigrated from other areas of Indonesia live in Bali. At the same time, tourism has changed the paddy fields into residential lands and disorganized the traditional lifestyle of hundreds of Balinese who had been cultivating rice in the paddy field.

The points that became clear from hearing investigation into members of a Balinese irrigation system(*Subak*) in *Desa Pemogan* are as follows. Today, in *Desa Pemogan*, there are hundreds of Muslim immigrant workers from *Java* and *Lombok*, as well as Bali Hindus. In addition, there are many people who are engaging in various occupations such as hotel and restaurant employees, drivers, self-employed people, and other non-farming occupation. Immigrant workers consist of two categories. One is that of low wage day laborers and the employees of self-employed people. The other is the managers of self-employed people. The former are called 'KIPEM' (*Kartu Identitas Penduduk Musiman*), who are short term laborers from other areas of Indonesia. The latter are better off financially. These immigrants change their place of residence and become members of *Banjar*. Consequently, we have witnessed an increase in immigration, high mobility and the disorganization of the traditional way of life which has been maintained by the Balinese.